

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

嵩山



豊橋校区史

4

Suse



嵩山蛇穴 2,115m² 昭和32年7月1日認定
 嵩山蛇穴は、奥平の別荘地（現在、各荘別荘）で築かれた別荘地跡
 遺跡でも、人（古事）から1500年（約）の歴史があり、入口付近
 の土層で出土した古銭、土器、石器等の出土品から、古墳時代の
 遺跡であると推定されています。また、古墳時代の遺跡であること
 から、古墳時代の遺跡であると推定されています。古墳時代の遺跡
 であることは、古墳時代の遺跡であると推定されています。古墳時代
 の遺跡であることは、古墳時代の遺跡であると推定されています。古
 墳時代の遺跡であることは、古墳時代の遺跡であると推定されてい
 ます。古墳時代の遺跡であることは、古墳時代の遺跡であると推定
 されています。古墳時代の遺跡であることは、古墳時代の遺跡と推
 定されています。古墳時代の遺跡であることは、古墳時代の遺跡と
 推定されています。古墳時代の遺跡であることは、古墳時代の遺跡
 と推定されています。古墳時代の遺跡であることは、古墳時代の遺
 跡と推定されています。古墳時代の遺跡であることは、古墳時代の
 遺跡と推定されています。古墳時代の遺跡であることは、古墳時代
 の遺跡と推定されています。古墳時代の遺跡であることは、古墳時
 代の遺跡と推定されています。古墳時代の遺跡であることは、古墳
 時代の遺跡と推定されています。古墳時代の遺跡であることは、古
 墳時代の遺跡と推定されています。古墳時代の遺跡であることは、
 古墳時代の遺跡と推定されています。古墳時代の遺跡であること
 は、古墳時代の遺跡と推定されています。古墳時代の遺跡である
 ことは、古墳時代の遺跡と推定されています。古墳時代の遺跡あ
 ることは、古墳時代の遺跡と推定されています。古墳時代の遺跡
 であることは、古墳時代の遺跡と推定されています。古墳時代の
 遺跡であることは、古墳時代の遺跡と推定されています。古墳時
 代の遺跡であることは、古墳時代の遺跡と推定されています。古墳
 時代の遺跡であることは、古墳時代の遺跡と推定されています。古
 墳時代の遺跡であることは、古墳時代の遺跡と推定されています。

豊橋市教育委員会





校区のあゆみ 嵩山

永仁年間（1293～1299）中国の僧・日顔は、山稜を覆う濃い緑と山腹に点在する白い巨石の景観に故郷を懐かしみ、この地を嵩山と名付けたという。

山並み一帯の石灰岩は、数多くの鍾乳洞をつくり、その一つの蛇穴は、縄文時代の住居跡として国の史跡に指定されている。

東西に走る本坂通(姫街道)の石畳は、多くの人達が往き来した歴史の足音を秘めて、今も木々の陰影と夏草の中にある。

中国の古代や古典を題材とするスケールの大きな作品で人気のある小説家・宮城谷昌光氏は、著書『古城の風景1』の中で嵩山の印象を、次の様に述べている。「……最近では本坂を通ることが多く、当然、嵩山を通過するのであるが、その山色の美しさに陶然とさせられる。豊橋市内で最も美しいのは、嵩山から観る山の景色であろうと私はひそかに断定している。山麓の人家のたたずまいは、洛北に似ていて、閑雅である。もしも、そこに別荘をすえたら、朝夕、飽かずに山をながめているのではないか。」
この豊かな自然と姫街道に沿う歴史の里を末永く守っていききたい。



時の流れ



旧嵩山宿本陣前案内板



姫街道・藤上地区



重要文化財「旧方丈障壁画長澤蘆雪筆」の内「波涛図」部分（正宗寺蔵）



「本坂通三方原之図」部分（豊橋市美術博物館蔵）



姫街道・高山一里塚



姫街道・茶旧川橋付近



校区の文化財

嵩山の四季



田の草取り（小学校）



嵩山川での総合学習（小学校）



「ほたるの里」すせ 案内板



柿畑（次郎柿）



長彦川ホタルの乱舞



小学校運動会



雪の正宗寺

発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
嵩山校区総代会長

後 藤 惇

このたび、「校区史～校区のあゆみ」が刊行されるにあたり、嵩山校区においても各町内から推薦された方々で編集委員会を組織し、調査・執筆・編集・校正に積極的に取り組んでいただきました。

幸い、嵩山には平成5年に刊行された『郷土誌嵩山』があります。今回、これを底本として、与えられたページ数に内容を凝縮するとともに、新たに調査し加えられた資料、そして『郷土誌嵩山』刊行時から今日に至る間を補足しました。とは言うものの、その作業には大変な労力と長い時間を要してまいりました。

嵩山には、国指定史跡の嵩山蛇穴、姫街道、正宗寺など豊橋を代表する数多くの歴史的遺産、そして豊橋自然歩道やホテルが飛び交う自然が多く残されています。

本書によって、改めて校区の歴史や概要、そして豊かな自然を知り、先人の足跡を後世に伝え、これからの校区の活動と発展の一助になれば幸いです。

終りに、本書の刊行に際して、ご理解・ご協力をいただきました校区の皆様や編集委員の方々をはじめ、ご指導・ご協力をいただきました関係の皆様に変更して感謝申し上げます。

第1章 自然と環境

- 1 位置・土地 7
 - (1) 位置 7
 - (2) 土地 7
- 2 自然 9
 - (1) 地形・地質 9
 - (2) 植物 10
 - (3) 動物 11
- 3 気候 12
 - (1) 気候 12
 - (2) 風水害 12
- 4 交通 13
 - (1) 国道362号線 13
 - (2) 旧姫街道（本坂通） 13
 - (3) 長彦自然歩道（大知波道・豊川道） 14
 - (4) 石巻山裏参道 14
 - (5) 林道 14

第2章 歴史と生活

- 1 校区の歴史 15
 - (1) 縄文時代から古墳時代 15
 - (2) 古代から中世 16
 - (3) 近世 18
 - (4) 明治 24
 - (5) 大正から昭和へ 25
 - (6) 戦争の頃 26
 - (7) 戦後から現代へ 26
- 2 校区の産業 27
 - (1) 農林業 27
 - (2) 商業 28
 - (3) 工業 28
 - (4) その他 28
- 3 校区の活動 28
 - (1) 各種団体 28
 - (2) 体育活動 28
 - (3) 市民館活動 29
 - (4) 納涼まつり（盆踊り） 29
 - (5) 530運動 29

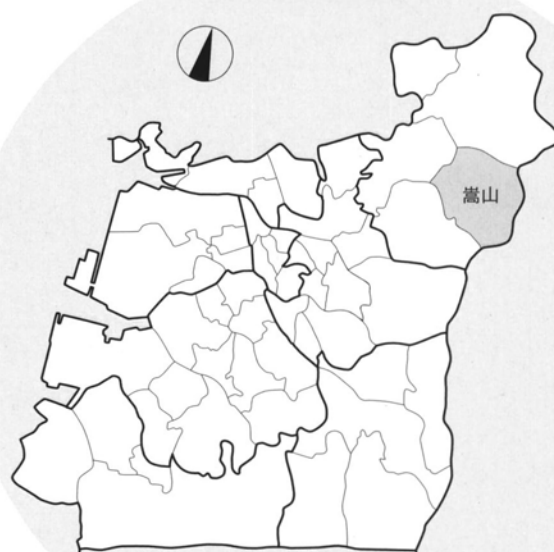
- (6) 敬老会・成人式 29
- (7) 戦没者追悼慰霊祭 29

第3章 教育と文化

- 1 学校教育と保育 30
 - (1) 高山小学校のあゆみ 30
 - (2) 高山小学校の活動 32
 - (3) 高山保育園のあゆみ 33
- 2 社会教育 34
 - (1) 八名郡教育会 34
 - (2) 高山青年会 34
 - (3) 月ヶ谷青年会 35
 - (4) 高山処女会 35
 - (5) 青少年団 35
 - (6) 報徳社 35
 - (7) 社会学級 36
 - (8) コミュニティ活動 36
- 3 社寺と文化財 36
 - (1) 神社 36
 - (2) 寺院 39
 - (3) 文化財 45
- 4 人物と民間伝承 46
 - (1) 人物 46
 - (2) 高山の大念仏 47
 - (3) 民間伝承 49

編集後記・参考文献 52

校区の位置



第1章 自然と環境

1 位置・土地

(1) 位置

嵩山町は豊橋市の北東に位置し、東はトンネルを越えると静岡県浜松市三ヶ日町本坂で、西は玉川校区、南は石巻校区、北は西郷校区と西以外は、三方を山に囲まれた人口1,616人（男788人、女828人）、499世帯の町である。（18.4.1 現在）

町の中央部に位置する小学校は、東経137度28分33秒、北緯34度47分50秒、標高61mの所にある。

(2) 土地

① 土地のようす

明治以来の行政区は藤上・藤下・中村・市場・月ヶ谷・湯巻・長彦の7区であったが、昭和43年度には自由ヶ丘一区・二区・三区ができ、また、平成3年度には東三河車検場跡地に分譲住宅が建設され、新しく「サンヒル嵩山」が加わり11区となった。

校区の総面積は、586.4haである。三方を山で囲まれているため山林が面積の78%を占め、田は11%、畑は6.5%、宅地は4%、雑種地・原野は0.5%である。

② 嵩山の集落を歩く

旧姫街道の嵩山宿、近代的な住宅街、ホテルの里など嵩山の集落を散策すると色々な景観や思いがけない発見に出会うことがある。

ア 昔の旅籠に沿って歩く

自由ヶ丘の東端、国道と分岐した左手の道

が旧姫街道である。

この平坦な街道の両側には、かつて旅籠が並んでいた。



中村区

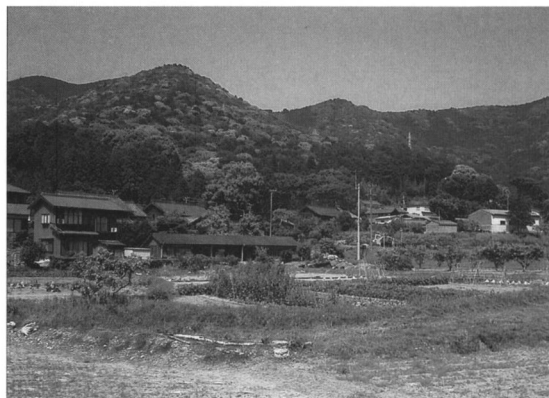
道を東に進むと姫街道の案内板が立っている。ここからが藤下区である。昔の嵩山宿の中心で本陣や旅籠が並んでいた。



藤下区

さらに進むと重王橋に出て、ここから藤上区となる。「姫街道」碑は本坂峠へ続く豊橋自然歩道（支線）の入り口に立っている。

嵩山一里塚までが約20分、嵩山七曲りまではさらに10分、峠茶屋跡には1時間程かかる。



藤上区

イ 自由ヶ丘・サンヒル嵩山を歩く

正宗寺の石門から城山南山麓一帯にあった5haほどの田畑が、昭和43年、宅地造成をして分譲された。

この地域には、校区外からの転居で、新しくスーパーマーケット、理容店などができた。

現在、世代も代わりつつあり、建替え・増改築などが行われている。



自由ヶ丘区



サンヒル嵩山区

また、平成3年には、自由ヶ丘の北に隣接していた東三河車検場の跡地に、県の住宅供給公社がサンヒル嵩山を造成した。和風・洋風の住宅が斬新な町並みを見せている。

ウ 市場・月ヶ谷を歩く

自由ヶ丘の西、国道362号線の両側に市場の家並みが続く。嵩山の中では、平坦地であり肥沃な耕地に恵まれている。天神川の堤には各種の草花が四季の彩りを見せている。



市場区

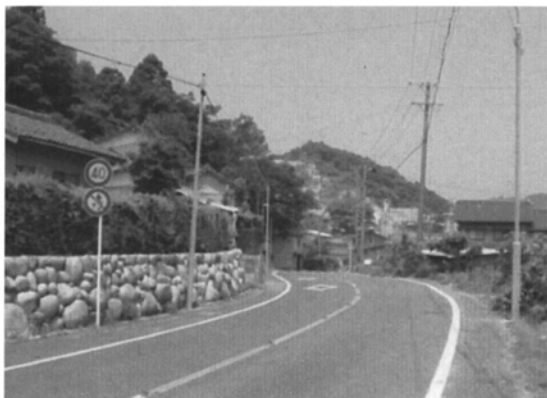
嵩山の西出入り口にあたり、通称二軒屋と北側山麓が月ヶ谷区である。北側山麓一帯には、古墳が点在し、萬福寺や若一王子社がある。



月ヶ谷区

エ ホタルの里を歩く

小学校の運動場から真っ直ぐに南に延びた道を進み、毘沙門橋を渡ると湯巻区である。江戸時代から採石や石灰焼きが行われていたが、現在は採石だけである。



湯巻区

湯巻区から東に進むと長彦区である。集落の入り口には長孫天神社があり、その奥には十輪寺がある。ホテルの群生地・長彦川の源流や長彦自然歩道の起点で長彦峠（大知波峠）へと続く。



長彦区

2 自然

(1) 地形・地質

豊橋市と静岡県との境には、赤石山系の南端にあたる標高200mから450m余の弓張山脈の山々が連なっている。

これらの山々は、1億年前から3億年前にできた秩父中古生層といわれる地層からなり、石灰岩、チャート、緑色岩などの古い堆積岩類でつくられている。

① 石灰岩地帯

セメントの原料となる石灰岩は、国内で産

出する数少ない鉱物資源の一つであり、嵩山には今も操業している鉱山がある。

石灰岩は酸に弱く、雨水や地下水に侵食されやすいため、石灰岩地帯特有のカルスト地形をつくっているが、嵩山にある蛇穴、水穴、新穴なども、長い年月をかけて地下水などが石灰岩の割れ目やずれた所に沿って流れたことによってできた洞窟である。

② 嵩山の蛇穴

蛇穴は奥行70mの鍾乳洞である。鍾乳石や石筍はかつてはあったが、今では目立つものはない。

また、蛇穴は縄文人の住居跡で洞内から縄文期の土器などが発見されたことから国の史跡となった。(蛇穴：P15参照)

③ 水穴

蛇穴の近くに奥行30m程の水穴がある。水量が豊かでカルシウム分を多く含んだ弱アルカリ性水である。水温が年間を通して平均15℃と飲用に適した自然水であるため、一時は簡易水道の水源になっていた。



水穴

④ 新穴

新穴は、昭和37年に新聞紙上で紹介された未開発の洞窟で、主洞の奥行は約180mで、内部は幾多の層に分かれていて、県下有数の鍾乳洞であることがわかった。

今は、現状保持と危険防止のため入洞禁止となっている。

(2) 植物

① 植生

嵩山の総面積の約8割が森林であり、社寺の境内などには、シイ、クスノキ、カシ、タブノキ、ヒサカキなどの常緑樹の自然林が見られるが、その他は、スギやヒノキなどの植林地となっている。

芽吹きと紅葉の季節には、植生の状態を鮮やかな色模様で見分けることができる。

嵩山の石灰岩地には、トキワトラノオやコバノチョウセンエノキなど石灰岩地を好む植物が生育して独特の植生となっている。

また、嵩山の蛇穴から浅間神社にかけて、バクチノキの自然林があり、林の中にはムクノキやアカメガシワなどの照葉樹林の群生が見られる。バクチノキの群落は、石灰岩地の植生とともに嵩山の自然を代表する貴重な植物である。

② 四季の植物

嵩山は水田や山林からなる山里で、四季折々の草花を楽しむことができる。

春先には、フキノトウに続いて畦道などではホトケノザやオオイヌノフグリの群生が見られるようになる。4月には新本坂トンネル入り口までの桜並木が人々の目を楽しませる。5月から6月頃には、長彦峠（大知波峠）へ向かう長彦自然歩道沿いでササユリが咲き、9月のお彼岸頃には、水田の畦道などでヒガンバナの群生が見られる。

10月頃から雑木林のアケビの実が熟し、12月下旬には浅間神社のイロハモミジが落葉し、参道や斜面が錦の葉で彩られる。

③ 巨木・名木

平成17年3月に豊橋市が発刊した「とよはしの巨木・名木100選」に嵩山から9本の木が選定された。

ア 不動の滝のケヤキ

市内のケヤキの中では太く、不動の滝のシンボルで、滝壺の右上にある。



幹周：365cm、高さ：31.3m、枝張り：25m×23m

イ 正宗寺のスギ

勅使門の手前にあり、市内のスギの中では大きく、周辺にも太いスギが点在している。



幹周：543cm、高さ：37.5m、枝張り：22m×23.6m

ウ 浅間神社（足浅間）のアカガシ、カゴノキ、クスノキ

足浅間には、市内で最も高いアカガシ（19.6m）と最も太いアカガシ（幹周350cm）がある。

また、カゴノキは、手水舎の脇、南斜面にあり、雌雄異株で樹皮が鹿の子模様の美しい木である。

足浅間から腹浅間に向かう参道の南斜面には、市内でも太く樹形に迫力のあるクスノキがある。



クスノキ

幹周：550cm、高さ：26.4m、枝張り：25m×29m

エ 浅間神社（腹浅間）のタブノキ、ヒノキ・アカガシ

市内のタブノキの中では太い。



幹周：375cm、高さ：22.8m、枝張り：19m×18m

また、ヒノキとアカガシが根元から合体した木も巨木・名木として選定されている。

オ 蛇穴のバクチノキ

蛇穴の周辺に点在しており、灰褐色の樹皮が鱗片状に剥がれると、その後が鮮やかな赤褐色になり、その姿が博打に負け、身ぐるみ剥がれる様子を例えて付けた名前といわれる。



幹周：66cm、高さ：12.5m、枝張り：14.7m×11m

(3) 動物

豊かな自然が残る嵩山には、多くの動物が生息している。野原にはヒメネズミやカヤネズミなどの小動物が住み、耕作地や集落近くにはイノシシやタヌキ、サルなどが食べ物を探しに夜間、現れる。

田植えの時期には、カエルが一斉に鳴きだし、それらを餌とするヤマカガシやシマヘビなどが見られるのもこの時期からである。

嵩山は緑に包まれているため、四季を通して鳥の鳴き声は絶えることはない。

山林では、春から夏にかけてウグイスやオオルリ、サンコウチョウ、冬にはマヒワなどの鳥を見ることができる。

空飛ぶ宝石といわれるカワセミも小学校横の嵩山川や天神川などで見ることができる。

また、正宗寺の裏山をはじめ各地区の社寺の森では、コゲラ（キツツキの仲間）がカンカンと木をつつく音が聞こえる。

カルスト地形の嵩山には、蛇穴をはじめ多くの洞窟があり、キクガシラコウモリ、ハバメクラチビゴミムシ、ミカワホラヒメグモなど洞窟独特の生物が生息している。

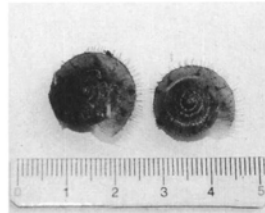
昭和29年に発見されたゴミムシは「ジャアナヒラタゴミムシ」と蛇穴に因んで命名され、同42年、岡本恒治氏（当時石巻中学校教諭）が調査した時、真性洞穴性多足類の新種を発

見「ジャアナオビヤスデ」と命名した。普通のヤスデは丸くなったりするが、新発見のジャアナオビヤスデは、体を丸くすることはできない。洞穴の奥の土砂の上に棲み、大きさは1～2mm、色は白色をしている。

愛知県に分布している陸貝は139種、そのうち嵩山・石巻地区で61種の生息が記録されている。蛇穴周辺には、生きている化石ともいわれるホラアナゴマオカチグサをはじめ、ミカワマイマイ、ベニゴマオカタニシ、キセルモドキ、オオケマイマイ、オオギセルなど石灰岩特有の陸貝が生息している。



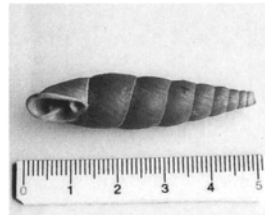
ミカワマイマイ



オオケマイマイ



ベニゴマオカタニシ



キセルモドキ

天野影継氏の調査報告 昭和14年

・ミカワマイマイ

嵩山を模式産地として新種に記載。現在、絶滅危惧種に指定、殻の大きさ3～4cm、色は茶褐色で左巻、石巻地区を中心とした弓張山脈の石灰岩地帯に分布。

・ベニゴマオカタニシ

石巻山を模式産地として新種に記載、殻の大きさ2mmほどの微小貝、色は淡紅色で石巻地区を東限に西日本に分布。

また、6月になると長彦川・天神川をはじめ水辺一帯でホタルが見られ、一時期少なかったホタルも最近が増えてきて、見に来る人

が多くなった。平成8年から小学生によりゲンジボタルの幼虫が放流されており、案内板を建てるなど校区としてもホタルの育成を通して環境保護活動に取り組んでいる。

3 気候

(1) 気候

豊橋地方の気候は、夏は雨が多く冬は乾燥する東海式の気候に属し、遠州灘を流れる黒潮の影響を受けて、比較的温暖な地域である。

嵩山校区は、弓張山脈の西側の山麓にあるという地形の影響もあって、冬は「三河のカラッ風」といわれている北西の季節風が強いが一年を通じて同じ向きの風が吹くことが多い。夜は山の冷気で冷え込みが厳しく、豊橋市の平均気温（11月～3月）より嵩山の気温は2℃から3℃低い。積雪量も市街地より多い。夏の日中の温度は市街地と変わらないが、朝夕の気温が低いので過ごしやすく、冬は山に入ると風はないが、冷え込みは強い。

降水量は、年間およそ2,300mmで春から夏にかけて雨量が多い。

(2) 風水害

① 13号台風

昭和28年9月25日17時頃、紀伊半島南端付近に上陸した13号台風は、18時30分頃知多半島に再上陸し、岡崎付近を通過して長野県方面に向かった。

13号台風は、室戸台風以来、最大規模の台風といわれ、伊良湖測候所では中心気圧957hPa、瞬間最大風速39.9m/秒を観測した。

また、台風接近時が満潮時と重なったため、神野新田などは高潮で堤防が決壊し、一瞬にして家や田畑が押し流されるなど多くの被害が出た。

嵩山では、床下浸水や雨戸が飛ばされたり、

道路は雨水が川のように流れ、堤防も各所で決壊したりして、農作物の被害も大きかった。

豊橋市は初の災害救助法を適用した。

② 伊勢湾台風（台風15号）

昭和34年9月26日18時頃に紀伊半島に上陸した台風は、929hpaの超大型台風で、豊橋市でも瞬間最大風速45m/秒総雨量225mmを記録し、死者8名、負傷者127名、建物損壊6,772戸の甚大な被害であった。

嵩山でも、家屋の倒壊や雨戸、屋根瓦の飛散、倒木など被害は大きかった。

③ 集中豪雨

昭和37年7月2日（総雨量344mm）と昭和49年7月7日（総雨量302mm）に集中豪雨に見舞われ、周囲は雨水の海と化し、山野は土石流で無残な姿となった。

④ 大雨・台風による避難勧告

平成16年10月は、全国各地で秋雨前線による大雨や台風22号、23号の上陸による土砂災害、河川の氾濫、高波による堤防の決壊など大きな被害が発生した。10月5日には、1日の雨量が100mmを超え、時間雨量30mmの強雨が観測され道路は冠水し、山沿いの道は河川と化し、農業用水路も満水となったため、土砂災害の恐れがあるとして嵩山町、石巻中山町、石巻本町馬越地区に10月5日(火)、9日(土)、20日(水)の3回にわたり避難勧告（9日は嵩山町のみ）が発令された。しかし、いずれも被害は少なかった。

4 交通

(1) 国道362号線

嵩山を東西に走る国道362号線は、豊川市を起点とし静岡市を終点とする延長約156km

の幹線道路で、嵩山の人々にとっては、通勤、通学、買物などで利用する生活道路でもある。

従来の本坂通は道幅も狭く、曲折も多いため交通の難所であった。こうした課題の解消の整備工事と合わせて、新トンネル工事が昭和50年11月より愛知・静岡両県の道路公社によって始められ、昭和53年4月に長さ1,379m、幅8.5mの新トンネルが完成した。

峠のトンネルと比べれば、長さ6.8倍、幅2.5倍で、車の通行は有料（6：00～22：00）だが、大型車も通行可能となり道路も直線化して交通量も急増した。

かつて、旧道の峠のトンネルが開通したのは、大正4年、そして、大正14年に豊橋・三ヶ日間に本坂経由で乗合バスが通るようになった。その後、自家用車の普及でバスの利用も減り、峠越えは廃止となり、現在は豊橋駅と嵩山間の折り返し運転をしている。

昭和53年、新たな362号線の敷設で道路の勾配も少なく、通行も大変便利となって、地域への恩恵は大きく、嵩山側の入り口に、工事の記念碑が建立されている。

(2) 旧姫街道（本坂通）

この街道は、見付宿（磐田市）から東海道を離れ気賀宿、本坂峠を経て御油（豊川市）で再び東海道に合流するまでの約61.5kmの道である。（旧姫街道P20参照）

嵩山の麓から本坂峠までは、昭和46年地元住民と豊橋自然を守る会などにより豊橋自然歩道の支線として整備された。



(3) 長彦自然歩道 (大知波道・豊川道)

この道は、弓張山脈を越える遠州との交流の道として古くからあった。



湖西からは、豊川稲荷参りや三河と生活物資を運ぶ交易の道として豊川道といわれ、嵩山では大知波道と呼んでいた。

平成14年3月3日、静岡県側の豊川道と一体化した自然歩道として、大知波道を整備し、集落の名称をとって長彦自然歩道とした。

(4) 石巻山裏参道

昔は石巻神社への裏登山口として、湯巻の集落から多くの人々の通行があった。今は、利用する人も手入れをする人もいないため、かつての面影もなく参道は荒れている。



(5) 林道

嵩山は山に囲まれており、山を管理するための林道がある。山林経営は輸入材の増加や後継者不足により低迷しており、間伐も行き

届かない状況で林道の利用も少ない。

① 北山線 (延長1,419m 幅員3.6m)

国道362号線で、旧本坂トンネルに向かう途中の通称「大曲」が林道の入り口である。



② 正宗寺線 (延長563m 幅員4.0m)

国道362号線の正宗寺入り口の石柱から北に進み、自由ヶ丘住宅を過ぎた左側が林道の入り口である。



③ 山尾曾根線 (延長1,000m 幅員2.4m)

市場集落から南に真直ぐな道は、観音山の西側に伸び、墓地の前を過ぎると林道の入り口となる。



第2章 歴史と生活

1 校区の歴史

(1) 縄文時代から古墳時代

① 縄文時代と嵩山蛇穴

嵩山には縄文時代の遺跡として、嵩山蛇穴^{すせじゃあな}遺跡をはじめとして、立岩遺跡^{たていわ}、枇杷山洞窟^{びわやまどうくつ}遺跡、北山遺跡^{きたやま}が今までに発見されている。

この内、嵩山蛇穴遺跡は、浅間山の山腹、標高約140mの位置に開口している。この地区は、有数の石灰岩地帯であり、長年の侵食作用によって各所に洞窟が形成されている。これらの洞窟のうちの一つが嵩山蛇穴遺跡で、その規模は入り口の幅3.5m、高さ1.3m、奥行き約70mで、入り口がほぼ南に向いている。



嵩山蛇穴

嵩山蛇穴遺跡は、昭和16・17年に文部省囑託の上田三平氏や愛知県主事の栗次郎氏が、昭和22年には考古学者の江坂輝弥氏・久永春男氏・紅村弘氏・後藤辰男氏によって、発掘調査が計4回行われた。出土遺物には、縄文土器の破片や石器類、骨や角で作った刺突具などがある。この他に当時の人が食べた

動物、鳥の骨や貝殻も見つかっている。縄文土器は草創期、早期、前期、中期のものが見られた。草創期のものは、縄を土器の表と裏に押し当てて文様をつける表裏押圧縄文土器と呼ばれるもので、今から約10,000年前のものである。これは豊橋市内から出土した縄文土器の中で最も古く、愛知県でも豊田市の酒呑ジュリナ遺跡^{のみのみ}で出土した土器に次ぐ古さである。早期のものは木の棒に刻みをつけ、それを回転させ楕円や山形の文様をつける押型文土器で約8,000年前のものである。

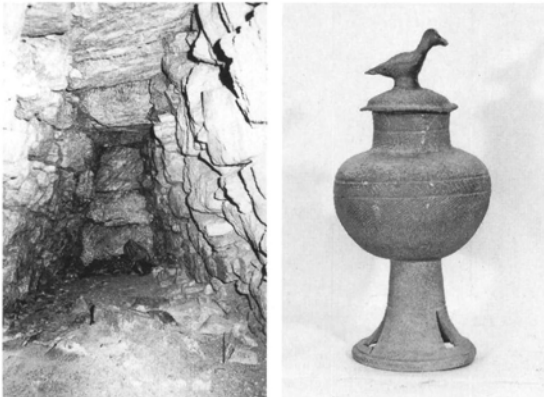
この他には、前期の厚さが薄い土器や、中期の竹を半分に割って文様をつけたものが出土している。この中でも早期の押型文土器が一番多く、このことから嵩山蛇穴遺跡は早期を中心にした遺跡であることが確認された。

このように嵩山蛇穴遺跡は大変貴重な遺跡であるため、昭和32年に国の史跡に指定され保護されている。

② 古墳時代と萬福寺古墳

古墳時代を通じて、石巻中学校区周辺には、他の地区に比べて前方後方墳・前方後円墳をはじめ、多くの円墳などが造られた。特に、横穴式石室が導入され6世紀から7世紀にかけては、小さな円墳が比較的狭い範囲にまとまって造られるようになり、これを群集墳と呼んでいるが、嵩山にはこうした数多くの円墳が北側の山の南斜面に築かれている。

北山古墳群（17基）・荒木古墳群（25基）・山軍場古墳群（7基）・桂土古墳群（13基）・奈木古墳群（15基）などである。



萬福寺古墳石室と鳥鈕蓋付台付壺

この中でも、萬福寺周辺に分布する奈木古墳群の中にある萬福寺古墳（奈木11号墳）は、6世紀の中頃に造られた直径15m程の円墳で、墳丘上には、葺石が見られる。石室は、前室と羨道との区分がない無袖の横穴式石室で、全長8m程である。石室内には13体分の人骨があり、長い期間にわたって多くの追葬があったことがうかがわれる。副葬品には、勾玉・管玉などの玉類や耳環といった装身具、直刀・鉄鏃などの武器、提瓶・鳥鈕蓋付台付壺などの須恵器が数多く発見された。萬福寺古墳は、奈木古墳群の中にあっては、やや規模の大きなもので、有力者の墓であったことが推測される。

(2) 古代から中世

① 大化改新前後

大化改新以前、豊橋市・豊川市を中心とする東三河（設楽を含む宝飯・渥美・八名の3郡）は「穂国」と呼ばれており、豊田市・岡崎市を中心とする西三河（碧海・額田・加茂・幡豆）は「三河国」と呼ばれていた。それが、大化改新以後「穂国」と「三河国」が統合され新しい「三河国」が誕生した。

大化改新以後の大宝令の制定によって新しい村落の形態が組織された。

時代が少し下がるが、平安時代の9世紀中頃に編纂された『和名抄』によると、嵩山は

三河国の八名郡、さらに下部組織である「美和郷」もしくは「和太郷」に属すると伝えられている。

美和郷は、現在の石巻町の神郷・金田・神ヶ谷を中心として、牛川・玉川・下条・嵩山も含まれるであろうといわれている。さらに、和太郷は現在の石巻本町の和田を中心として、月ヶ谷・長楽、さらには嵩山・下条までも含まれるであろうと考えられている。

② 条里制遺構

中央政府は、郷などの行政区画を整えた上で、戸籍を作り6歳以上の男女に田を与えた。これは豪族が土地を持ちすぎるのを防ぎ、農民の生活を保証するとともに税を確保するところにねらいがあった。このため、田地は整然と区画された。これを条里制という。

嵩山の条里制遺構については、愛知大学教授歌川學氏が『東三河地方における条里制の遺構』（愛知大学総合郷土研究所紀要、昭和33～36年）の中で「条里制遺構は、月ヶ谷、市場両集落の間の水田地帯に存し、約19坪近くを検出し得る。（後略）」と述べている。

③ 本坂峠を越えて

大化改新以後、中央集権国家が成立すると駅馬・伝馬の制の確立により全国的に交通制度が整備されることとなった。



本坂峠と坊ヶ峰

三河国は畿内と東国を結ぶ交通上の要衝にあたり、西より鳥捕（岡崎市矢作町）、山綱（岡崎市山綱町）、渡津（宝飯郡小坂井町）の3駅を通り、これより渡船で豊川を渡り、現豊橋市内を通過し海岸に沿って遠江国猪鼻駅（静岡県浜名郡新居町）に至る道は、後の東海道とほぼ同じルートである。ただ、この頃は現在と違って、豊川（当時は飽海川と呼ばれていた）の川幅が広く、しかも橋がないので早くから渡船が設けられていた。この渡しは「志香須賀の渡し（飽海の渡し）」と呼ばれ川幅が広く流れが急なことと、波風の強いことで有名な難所の一つであった。

そこで、豊川上流の川幅の狭い地点でのより安全な渡河による交通ルートも発達した。これが、古くは万葉の歌に「二見の道」とうたわれ、後世に本坂通（通称：姫街道）と呼ばれた本坂越えの道である。

④ 本坂越え以外の道

三河・遠江の境にある弓張山脈には多くの峠がある。その峠の中で、古代から通行のあった道はいくつかあるが本坂峠以外で嵩山に関係のある峠道となると長彦峠（大知波峠）がある。この道は、現在の長彦の集落奥南をそのまま弓張山脈の尾根まで登る急坂の道である。登りきった峠を、嵩山側では「大知波峠」、湖西の大知波側では「長彦峠」と呼んでおり、この峠道を利用して昔から多くの人たちが三河・遠江間を行き来した。特に近世になって大知波近在の人たちは、この峠を越え嵩山に至り姫街道と合流し豊川稲荷参りをしたようである。

⑤ 戦国時代の嵩山と城

戦国時代に入ると、東三河でも在地土豪が互いに勢力争いをはじめた。現在の豊川市南部から豊橋に進出し、吉田城の前身である今

橋城を築いた牧野氏、田原から豊橋に進出し、二連木城を築いた戸田氏、蒲郡の鶴殿氏、豊橋北部に根拠地を築いていた西郷氏などが勢力の維持に努めていた。

このうち嵩山は、月ヶ谷城を築き正宗寺を菩提寺としていた西郷氏の領有するところとなった。西郷氏自身は今川氏についたり、松平氏についたりして大永年間（1521～28）の初めころから天正18年（1590）に至るまでの約70年間余り、この地域を統治し各方面に大きな足跡を残した。

ア 左京殿城



左京殿城

左京殿城について『石巻村誌』は、城主を小枝左京進とし、「大永3年（1523）、西郷弾正左衛門正員に追われて逃亡したと伝わるが、その徴すべき史料を見出すことが出来ぬ」としている。城址は、弓張山脈から北西に向かって伸びた尾根の先端、比高30mに選地した三遠境のいわゆる「境目城」である。縄張りからみると、山頂部を本曲輪とし、この曲輪には土塁を巡らし、北東と北西に小曲輪を配している。曲輪以外に、土塁・土橋などの遺構が確認できる。

イ 月ヶ谷城

月ヶ谷城は、本坂峠を越えて迫ってくる今川方の軍勢に対して築かれた城である。月ヶ谷城の縄張りが今川氏を意識している点から、築城は西郷氏が今川氏より離反し、松平清康

についた時期（1521～28）と考えられるが明らかではない。

月ヶ谷城は、標高205mの山城で、嵩山の中央を東西に走る本坂通（姫街道）を眼下に見ることができる。山頂に本曲輪と二の曲輪を配し、さらに二の曲輪の南に带状腰曲輪を設けて、この三つの曲輪で主要部を形成している。本曲輪には土塁が残り、土留めのための石積みが見られる。また、腰曲輪には井戸が残っている。



月ヶ谷城

ウ 市場城

市場城は、月ヶ谷城の南麓下に位置し、遺構はわずかに土塁が現存するのみである。地形からは館城形式であったものと考えられるが、この城も沿革を明らかにできない。『三河国二葉松』などにある「嵩山村古城」が、この市場城と考えられ、そこには西郷氏のほかに奥山氏の名もみえる。この城は、独立した1城ではなく、月ヶ谷城の居館とする考え方もある。

(3) 近世

① 江戸時代の嵩山

江戸時代、現在の嵩山校区は嵩山村（現在の藤藪、中村、市場、湯巻）と月ヶ谷村と長彦村の3カ村に分かれていた。

ア 嵩山村

嵩山村は江戸時代を通じて吉田藩領で、そ

の石高は、慶長9年（1604）の検地帳で599石余、寛永年間の「三河国村々高附」では670石余、元禄14年（1701）の「元禄郷帳」では614石余、天保5年（1834）の「天保郷帳」では692石余、「旧高旧領取調帳」では704石余となっている。正徳2年（1712）の「嵩山村御指出帳」によると家数158軒（本百姓102軒、水呑56軒）、人数855人（神主2人、男428人、女419人、道心1人、比丘5人）、椿実3斗8升5合、石灰96俵を産出する村であった。

東海道のバイパス（付属街道）本坂通（通称、姫街道）の宿場として江戸中期から末期にかけて賑わいをみせた。しかし、宝永4年（1707）、遠州灘におこった大地震によって今切（新居）の渡航が不安になるとともに、三ヶ日から御油宿への交通が増加した。明和元年（1764）から伝馬宿次を命じられたため、人馬の継立には相当苦労したようである。

村周辺は石灰岩地帯で、古くから石灰を製造していた。元禄10年（1697）の差出帳には、すでに小物成（雑税）として「一、白土九拾六俵但シ式斗入 一、錢壱貫五百文白土祝銭」と記録されており、この数字は明治維新まで続いた。現在、この石灰を焼いた竈がいくつか残っている。



正宗寺勅使門

寺院は、臨済宗の正宗寺があり、寺伝によると永仁年中（1293～99）南宋の日顔によっ

て創立。嵩山の地名の由来は日顔の故郷中国の嵩山すうざんによると言われている。寺伝によれば、室町時代には、八名・宝飯・渥美・遠江国引佐の各郡に多くの末寺を数えたという。寺宝には、国指定重要文化財の長澤蘆雪筆旧方丈障壁画をはじめとして数多くの古画を所蔵している。また神社は、この地域の石灰産出を想定させるような神社名の白土社しらつちしゃがある。社伝によれば、嘉暦年間（1326～29）の創立と伝えられ、天正6年（1578）の棟札をはじめ多数の棟札を蔵している。また、天正20年（1592）銘のある鰐口が伝わっている。

イ 長彦村

長彦村ながひこむらは、江戸時代を通じて吉田藩領で、その石高は慶長9年（1604）の検地帳で114石余のうち十輪寺領3石・大明神領3石、「三河国村々高附」では128石余、「元禄郷帳」・「旧高旧領取調帳」では135石余となっている。明治5年の「村差出明細帳むらさしだしめいさいちよう」によれば家数27軒、人数109人、馬8疋、鉄砲8挺とある。

地名の由来は、村内にある長孫天神社おさひこてんじんしゃに因るといわれる。慶安2年（1649）書写本の「三河国内神明帳みかわこくないしんめいちよう」に「正五位下、長孫天神、坐八名郡」と紹介されている。



長孫天神社

寺院は、永和年間（1375～79）頃の開基で、慶長6年（1601）伊奈備前守の黒印状に寺領3石と記載されている正宗寺の末寺で十輪寺じゅうりんじがある。神社は地名の由来にもなった長孫天

神社で養老年間（717～24）の創立と伝えられ、少彦名命を祀っている。伊奈備前守の黒印状には「長彦村、大明神主」とあり、「三州吉田領神社仏閣記」にも「大明神」とのみある。神社所蔵に、明德3年（1392）銘の鰐口があるがもともとは、長孫天神社に奉納されたものではない。（鰐口P38参照）

ウ 月ヶ谷村

月ヶ谷村むしがやむらは、寛文3年（1663）から元禄10年（1697）まで旗本小笠原外記領の他は江戸時代を通じて吉田藩領で、その石高は、慶長9年（1604）の検地帳で220石余、うち若一王子社領2石・萬福寺領2石、「元禄郷帳」の229石を除き「三河国村々高附」「天保郷帳」「旧高旧領取調帳」はいずれも256石余となっている。



萬福寺

寺院は、貞和年間（1345～50）創立の正宗寺の末寺で伊奈備前守の黒印状に、寺領2石と記載されている萬福寺がある。境内の阿弥陀堂に安置する愛知県指定文化財の木造阿弥陀如来坐像1軀は建治2年（1276）3月5日の補修銘がある。神社は天平年間（729～49）創立と伝えられる若一王子社があり、平安時代の神像、明応年間（1492～1501）以来の棟札などを所蔵している。

地名の由来は、萬福寺の山号・定紋の名前か、猪除けの古語からか定かではない。

② 本坂通（姫街道）と嵩山村

ア 東海道と本坂通

江戸幕府は、全国を統一して支配する必要から、江戸の日本橋を起点とする東海道・中山道・奥州道中・日光道中・甲州道中の五街道を陸上交通路として整備した。中でも東海道は江戸と京・大坂を結ぶ全行程約125里（500km）に及ぶ国内随一の主要幹線で多くの旅人で賑わった。

また、主な街道には一里塚を築き並木を植え、軍事上の理由から東海道では大井川など大きな川には架橋を許さず、箱根や新居には関所を置いて旅人を監視した。

街道には宿場を設け、公用の旅行者のため問屋場を置いて、人足伝馬を用意した。また、宿場には大名・公家・幕府役人など身分の高い人たちが休憩・宿泊する本陣と脇本陣のほか、一般の旅人のための旅籠屋や木賃宿があった。

なお、東海道は途中から佐屋路・本坂通の付属街道にもつながっていた。

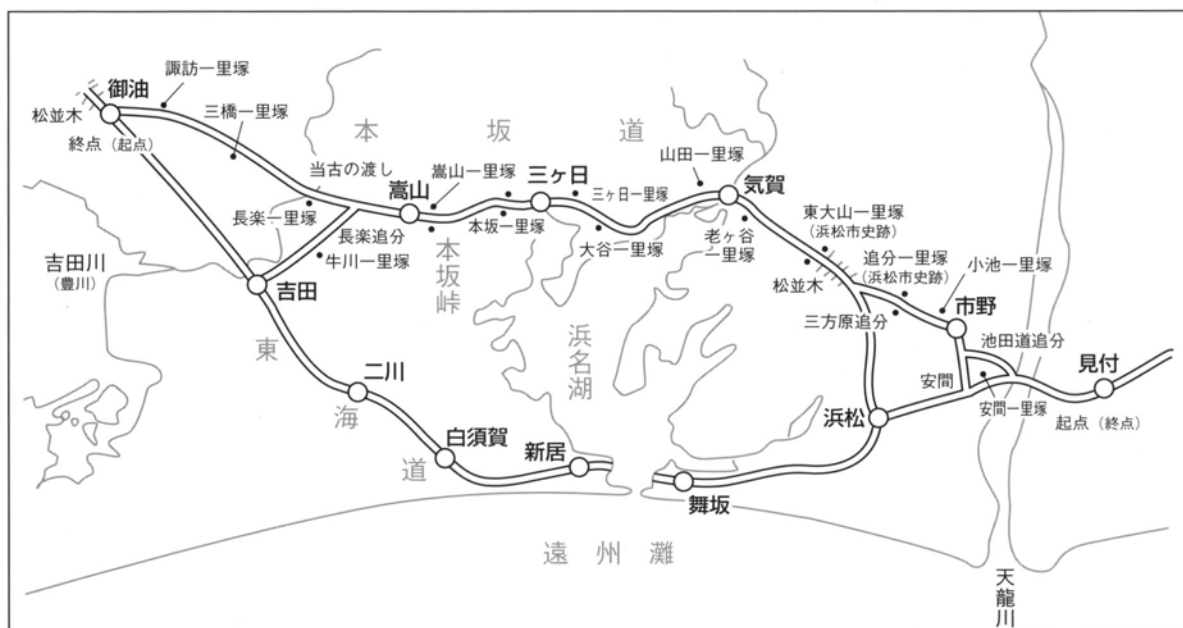
イ 本坂通（姫街道）

三ヶ日より三河と遠江境の本坂峠を越え、

嵩山・豊川を經由して御油に至る道、あるいは逆に御油から嵩山より三ヶ日・浜名湖北岸を通り市野を經由して磐田の見付に至る15里14町（61.5km）の道が今日“姫街道”と呼ばれ親しまれている道であり、江戸時代には東海道の付属街道（バイパス）として数多くの旅人が行き来した。

姫街道という名は俗称で、正式には「本坂^{ほんざか}通^{どおり}」と言った。また、江戸時代の公文書には「本坂通」のほか「本坂道」「本坂越」「本坂街道」などとも記されており、姫街道の名称は使われていない。

姫街道という名前の由来については、いろいろな説がある。その一つに、東海道を通行する女性が新居（今切）関所の「入り鉄砲に出女」に関する厳しい取調べや舞坂・新居間の今切渡海の危険を避けたり、今切の名を嫌ったりしてこの街道を多く利用したためと言われている。また一つには、この街道が東海道の旧街道として“ひね”街道の名で呼ばれ、それが訛って姫街道となったとも言われている。これに女性の美しい行列風景が重なり「姫街道」の名前が流布されたと思われる。



東海道と本坂道略絵図

現在、嵩山校区内の姫街道を歩いてみると、まだ昔の街道の面影が各所に残っているの気がつく。

本坂通・本坂道の名前の由来となった本坂峠は、急勾配で姫街道の中でも一番の難所ではあるが景勝の地でもあり、昔は茶屋が置かれていた。

本坂峠からの急勾配を西に下り、姫街道と国道362号線が交差している所からしばらく下ると雑木林の中にこんもりとした塚が残っている。

これが江戸日本橋より数えて73番目の一里塚で、現在三河における姫街道の中で唯一残っている“嵩山の一里塚”である。江戸時代の『本坂宿村大概帳』によれば「壺ヶ所、木立無之、但、左右之塚共嵩山地内」とある。この他、嵩山から御油までの間に一里塚が嵩山村をはじめとして長楽村・三橋村・市田村の4カ所あると記録されている。



嵩山の一里塚

一里塚から姫街道を下ると山裾の広く緩やかな道になり、一部に石を敷き詰めた石畳の道が当時の面影を偲ばせ、さらに下ると夏目本陣や、幕末に11軒の旅籠が建ち並んでいた宿場の中心にさしかかるが、近年家の建替えにより、あまり昔を偲ぶことはできなくなった。それでも、本陣東隣の家の石垣や門をはじめとして土蔵にその片鱗を見ることができる。また、宿場の西口には文政10年（1827）建立の秋葉山常夜灯が残っている。



昔の面影が残る姫街道

そして正宗寺入り口の石柱前から、現在の国道362号線と姫街道が重なる。さらに自由ヶ丘を過ぎ市場の西はずれから362号線と別れ左に曲がり、またすぐ右に折れ真直ぐ西に向かい二軒屋で再び362号線と合流して豊川方面に向かう。このように姫街道は、大筋で現在の国道362号線とほぼ重なっている。また、長楽追分から吉田（豊橋）に向かう道も、かつては姫街道と呼び親しまれていた。

ウ 宝永の大地震と嵩山村

宝永4年（1707）10月4日の昼八ツ時（午後2時頃）、遠州灘に起こった大地震は東海地方に壊滅的な大打撃を与えた。特に、地震による高津波で浜名湖今切口が決壊し、新居・舞坂間の今切渡船は渡航危険となった。この時、新居関所の建物は破壊され、新居宿の家屋は411軒が流失・破損という全滅に近い状況であった。

そこで、東海道の旅行者は今切渡海の危険を避けて付属街道の本坂通に集中し、大名行列など数の多い旅行者をはじめとして交通量が急増した。このため、本来の伝馬継立設備を持たぬ本坂通沿道の村民は、大いに困惑した。そこで宝永5年（1708）4月、この事態に堪えかねた嵩山村では庄屋・組頭・惣百姓代ら7名の連印で本坂通の通行禁止を吉田藩役所に訴え出た。

宝永5年の大名等の本坂通の通行は上下合わせて300回以上、そのうち1,000人以上が16

回、100人以上が50回を越した。中でも6月4日の松平民部大輔まつだいらみんぶ だゆうの通行は6,000人を越す大人数であった。次の宝永6年も、このような状態が続き、幕府に幾度となく通行規制を訴えた。また、これとは反対に新居渡海を挟んで浜松・舞坂・新居・白須賀・二川・吉田の東海道6カ宿の交通量が減り、交通業務を生活の糧としていた宿場の人々は困窮した。そこで、これら6カ宿の役人は、宝永6年正月に道中奉行に対し、①諸大名の本坂通の通行禁止②今切渡海の航路を早急に改修③本陣・旅籠屋の助成金拝借について訴えた。続いて、同年3月再び東海道6カ宿は道中奉行に対して、諸大名の本坂通全面通行禁止と今切渡海の航路改修を願い出た。

そこで幕府は、同年7月から約4カ月かけて今切渡海航路改修工事を実施したが、復旧の後も東海道6カ宿の通行客は少なく、依然窮乏に明け暮れる状態であった。本坂通の村々と東海道6カ宿の度々の嘆願により、幕府は諸大名に対して宝永7年3月、風雨で新居渡海が危険な場合以外は本坂越えを禁じた。だが一向に効き目がないので、享保2年(1717)10月幕府は道中奉行の触書を所持する者以外本坂通の人馬継立を停止し、実質的に大掛かりな通行を禁止した。

しかし、それにもかかわらず翌享保3年には將軍吉宗の生母淨円院じようえんいん（御由利おゆりの方）が紀州から江戸に向かう途中本坂通を通行した。『参河国聞書』『淨円院様紀州ヨリ御下向之節御触書之寫諸留覚外』などによれば、まれにみる大行列で、人馬継立は高100石につき人足14人、馬4疋と定められた。この時、嵩山・袋井間で集めた人足5,092人、馬1,818疋、駕籠300提、供の者・送る者・迎える者など合計で実に1万人以上の行列が続いたといわれる。

また、特殊な通行例としては、享保14年

(1729)5月に清国の商人の献上した象が將軍吉宗に拝謁するため京都から江戸に向かう途中、新居渡海を避けて本坂通を通った。『本坂往来留書』ほんざかおうらいとめがき（気賀関所資料）によれば『広南国ヨリ江戸江下り牡象一匹吉田泊五月九日気賀



享保の象 二川宿本陣資料館蔵

泊り、長崎官物御奉行高木作右衛門様（中略）気賀村々庄屋引佐峠迄迎二出、浜松迄送り、見付宿泊り』とある。現在、三ヶ日町内に“象鳴き坂”というところがあるが、歩き疲れた象がここで苦しくなって鳴いたと伝えられている。

さて、再び享保20年(1735)11月、幕府は大名等に対し本坂通の通行を禁止した。ただ、全面的な通行禁止ではなく、風雨または急病などでやむを得ない場合、伝馬人足は大名自身で手配し、道中奉行に届け出ることとした。

エ 宿場としての嵩山

宝永地震以来の通行規制により本坂通の通行者は、全体としては一時減少したが、再び増加するようになった。そこで、明和元年(1764)9月幕府は老中連印の証文と道中奉行の触書により、嵩山村に対して「本坂通伝馬宿継」ほんざかどおりてんまを本坂通にある気賀・三ヶ日と同様に命じた。これにより、今まで単なる継立を命じられていた嵩山村は道中奉行の管轄となり、東海道の付属街道として宿駅機能を持つ嵩山宿として位置付けられた。

嘉永7年(1854)11月4日の朝五ツ過ぎ（午前9時）、突如大地震が発生した。その範

圃は東海・近畿・四国地方にわたり、震源地は遠州灘東部、マグニチュード8.4の激震であったといわれ宝永の大地震規模に匹敵するものであった。

この地震により、再び新居（今切）渡海は困難となり、本坂通の交通が急激に増加して宿場が困窮した。

そこで、大地震の翌年の安政2年（1855）3月に庄屋・組頭・長百姓7名の連印で吉田藩役所に嘆願書を提出している。それによれば、地震以来、大名などが新居渡海を避け、本坂越えをしている。この事態に百姓は再び困窮しているが、非常時なので仕方がなく、その代わり薪山役・土役・足役などを安政2年から安政6年まで休役してほしいと願い出た。その後、幕末の世情不安な時期となり本坂通の交通は再び増加し始め、明治を迎えた。

③ 江戸時代の産業「石灰」

嵩山の産業の中で、江戸時代にその名を知られたものに石灰がある。山頂が巨大な石灰岩が見事にそびえる石巻山、鍾乳洞としても有名な蛇穴・水穴でもわかるように、この地域は石灰岩地帯として知られており、古くからこの豊富な石灰岩を採掘していた。

石灰は、採掘した石灰岩を竈で焼いて得られたもので別名“白土”とも言った。これは、白土社とも深い係り合いがあると思われる。



【三河国八名郡嵩山村書上扣】夏目憲二氏蔵

当時の主な用途は、塗壁の漆喰、酸性土壌の中和肥料、虫害防除などであった。

石灰製造の起源は明らかではないが、延宝年間（1673～81）以前に遡ると言われる。夏目憲二氏所蔵の『三河国八名郡嵩山村書上扣』の中の元禄10年（1697）の差出帳によれば「一、白土九拾六俵 但シ式斗入 一、錢壹貫五百文白土祝銭」と記録され、同じく宝永3年（1706）の差出帳によれば「一、石灰九拾六俵 但シ式斗入 御運上 前々御用次第ニ指上申候、急ニ御用ニ而御座候節ニ薪払底ニ御座候得ハ炭木御売付被下候 一、錢壹貫五百文 石灰薪運上 但シ日照山之内前々ヨリ石灰薪仕来り候、則御役人様御証文所持仕候、此山之内長楽村ヨリ田養入相申候」とある。つまり、嵩山村では差出帳で記録のある元禄以前から石灰を製造し、小物成（雑税）として2斗入96俵と、石灰製造用の薪を採る代わりに1貫500文の運上銭（税金）を吉田藩に納めてきた。そして、これは幕末まで続いていた。

このように嵩山村では、江戸時代を通じて石灰焼きが行われていたが、文政4年（1821）7月に至り吉田藩主松平伊豆守は、嵩山村の後藤庄五郎に命じて牛川村小鷹野の石灰岩で石灰焼きをはじめさせた。吉田藩は、石灰役所を設け勘定方の役人が厳しく品質管理にあたって、生産した石灰は、江戸や大坂方面に送られた。この藩営事業の石灰製造は明治3年（1870）まで続けられた。



浅間下石灰竈

(4) 明治

① 新しい村づくり

政府は政治力の浸透を図るため、行政機構の組替えを行った。明治4年(1871)7月に吉田藩は豊橋県となり、同年11月に額田県と合併し、さらに翌年には愛知県と合併した。豊橋県の時は、戸籍区は嵩山・月ヶ谷・長彦は第13区であったが、額田県となると、第9大区第3小区となり、区内32村(総戸数732)の戸長は嵩山の後藤^{くへい}九平であった。

愛知県に合併されると、大区は第14大区と変わったが、小区は変わらなかった。

明治9年(1876)8月に郡区町村編成法が施行されて、大小区制は廃止となり、改めて第18区に所属した。

行政の改革が一応終ると、次は地租の改正を円滑に行うため、嵩山村、月ヶ谷村、長彦村の3村は合併を決め、明治9年7月に申請し、明治11年12月に「嵩山村」として認可された。初代の戸長は後藤九平、役場は戸長の私宅を使い、事務は筆生が行って、年行司の6名が村内の取りまとめを行った。

村議会は、明治10年11月に試験的に設けられたが、理由不明のまま半年後に廃止となった。しかし、明治13年の区町村会法で村議会が構成されることになると、3年前に廃止した経緯もあってか、議員の選出は5年後の明治17年になって7名の村会議員が決まり、近代的地方自治の第一歩を踏み出した。

明治22年10月、新町村制の施行で戸長役場は村役場となり、行政職と村議会を備えて、藤上、藤下、中村、市場、月ヶ谷、長彦、湯巻の各区には区長と区長代理を置き、村議会で村長、助役、収入役、書記、区長を決めるなど、新しい体制が確立された。

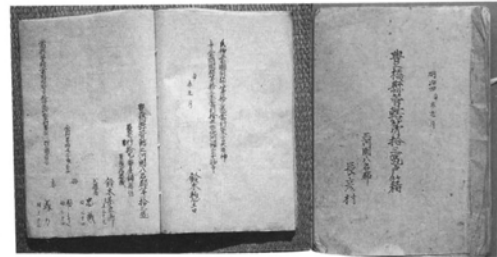
新組織による初代村長には後藤^{うしぞう}丑蔵が任命された。

② 戸籍の作成

明治3年に、一般平民に苗字をつけることが許されたり、翌4年には宗門人別帳に代わって戸籍が作られた。

嵩山、月ヶ谷、長彦の各村の屋敷に通し番号をつけ、家は戸主を定め、家内の人数、姓名、生年月日、戸主との続柄、菩提寺、氏神、土地の所有などを戸長に申告をさせ、戸主に責任をもたせて戸籍が作られた。

戸籍簿は、明治19年に国の公簿として書式が整えられ、役場で管理をした。



戸籍簿 明治4年 長彦区蔵

③ 地租改正の事業

明治6年の土地税制改革によって、地租は金納となり、土地を所有する地券が発行された。しかし、明治22年に登記法の公布によって地券は廃止となった。

嵩山の土地の評価は、8名の地位詮評委員によって行われ、明治9年6月には田畑の実地丈量帳11冊をはじめ、地引帳、絵図、収穫高による地位の地価表も作成された。

山林、原野は、住民に関心が少なかったため、適当に地価をつけたりして、明治15年には、すべての土地の評価作業は完了した。



嵩山村地価仕出帳
明治6年 後藤英二郎氏蔵

④ 石巻村の誕生

県は財政基盤を強固にするため、石巻周辺の各村に合併を勧めた。しかし、各村の意見の集約が難しいため、知事は職権で明治39年6月「西郷・嵩山・三輪・多米・玉川」の5村を合併して「石巻村」にすると決めた。

合併により住所は、例えば「嵩山村字宮下33番地」が「石巻村大字嵩山字宮下33番地」と表記することになった。石巻村の初代村長には、嵩山の後藤丑蔵が任命され、役場は明治41年9月に玉川の市場に新築された。



石巻村役場 昭和45年撤去

⑤ 村人の生活

農家の生活は、決して裕富ではなかった。昔からの農具で家族は共に働き、日銭を稼ぐため暇があれば日雇い、山仕事、車引きなどに出かけ、休む暇なしの日々であった。

明治20年代になって、養蚕が普及して「繭1貫、米1俵」の好景氣を迎えた時には、農家の半数以上が飼育をはじめ、今までの綿作地は桑園化した。養蚕で収益が増加すると、食生活からアワ、キビなどの雑穀が消えたが、蚕の飼育で家族の労働は一段と加重になった。

明治の後半頃より、一部の家で農耕に牛馬を使ったが、大方は人力に頼っていた。

明治も終り頃になると、街道筋の旅籠も廃れ、商い屋は、味噌溜り屋、豆腐屋、紺屋が各1軒、雑貨屋が2軒と数少なく、買い物は、店毎の「通い帳」で盆や晦日などにまとめて支払いをしていた。

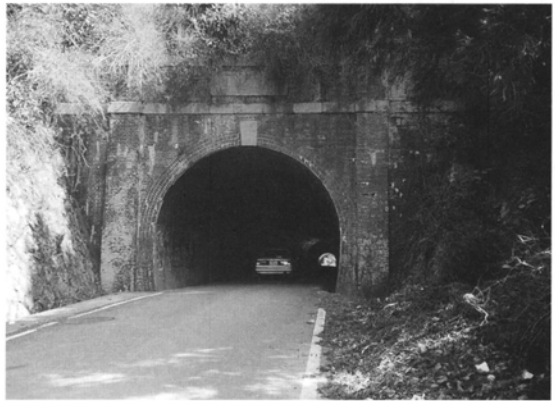
(5) 大正から昭和へ

① 本坂通の開削

愛知・静岡両県民の10年以上にわたる陳情のかがあって、大正3年(1914)に両県側から開削工事が始まり、翌4年7月にトンネルが完成した。

トンネルは、標高273mの所に、長さ200m、高さ4.5m、幅5m、レンガ3枚巻で、背面に漏水防止の亜鉛板を張ったものであった。

開削工事によって、道幅は3.5m～7mとなり、勾配も緩やかになって、両県との交流をはじめ、木材の搬出など地域の経済活動に大きく貢献することになった。



本坂トンネル 大正4年完成

② 夢の遠三電鉄「嵩山駅」

愛電(現名鉄)は、昭和の初期に交通網の拡大を図って、豊川より遠州への延長計画を立てていた。しかし、遠三電鉄が愛電に代わって、豊川線延長案を取りやめて豊橋線と結び、豊橋の向山、東田、牛川、玉川、嵩山、本坂、三ヶ日、気賀を経由して浜松へ行く路線計画を立て、起工の準備に取り組んだ。

昭和2年(1927)8月には工事を始める予定が、鉄道敷設の認可が遅れたり、経済界の不況が起きたりして、昭和5年10月になって事業は中止となり、軌道を走る電車を待ちわびていた地元の夢は、むなしく消えてしまった。

③ 農村の生活

田畑の耕作は、鋤、備中鋤を使っての力仕事であった。耕した田に水を引き、代掻き、田植えが終わると畦に大豆を播き、日除けのごぎを背負って田を這う草取りや、畑では雑穀や野菜作りと休む暇もない日々であった。

刈干した稲は、コバシで脱穀したが、昭和になって足踏式脱穀機が普及して、ハザ架けにしたり、荷物の運搬に大八車が使われた。

農村の単調な労働と自給自足の生活は、決して楽なものではなかった。大正の終り頃になって、カンテラに代わって電燈がついた。



稲のはざかけ

(6) 戦争の頃

昭和13年(1938)4月、国家総動員法が公布され戦時体制が強化されて、生活物資が切符による配給制になり、耐乏生活が始まった。

農作物は収穫しても自由にならず、米の供出は作付面積と家族数で、その家の割当量が決まり完納しなければならなかった。米以外にも麦、豆類、甘薯、南瓜なども供出した。

昭和19年7月頃より、小学校をはじめ区の集会場や各寺院に、それぞれ30名程の兵隊が分宿して、表浜の陣地構築用として木材の伐採や、山麓一帯に戦車壕の構築をしていた。その年の12月22日の昼、米軍機1機が飛来し、嵩山地区に6個の焼夷爆弾を投下した。この時は、幸いにも人や家畜に被害は無かったが、山林2haと田のはざかけ稲20aほどが焼失した。

(7) 戦後から現代へ

① 農地改革

アメリカの占領政策の一つとして、昭和21年(1946)に、在村地主の1町歩(1ha)を超える農地と、不在地主のすべての農地を、強制的に政府が買い上げ、小作人に売り渡して農地所有の平均化をはかった。

正宗寺5町歩、十輪寺8反歩、萬福寺4町7反歩の農地をはじめ、個人も規定を超える農地はやむなく手放した。

② 土地改良

昭和28年の秋から、29年の春先にかけて、湿田に陶管を埋めて暗渠にする工事を行った。当時は掘削機もなく、手掘りの埋管20kmの作業は重労働であった。

昭和30年代の後半になると、農作業は機械化時代を迎え、耕地の集約、農道の拡張、水路の改修などの必要に迫られ、昭和42年から、嵩山・長楽地区の圃場整備の大工事をするようになった。

この大事業が、区画・割当・交換とすべての業務が完了したのは、昭和49年で、総工費2.3億円、1反歩(10a)の経費の割合は約20万円であった。

③ 豊橋市への合併

昭和28年の町村合併促進法が契機となって、校区民の意向は豊橋市への合併が強く、石巻村議会も一致して、昭和30年3月1日付で高豊・老津・二川・前芝と共に豊橋市に合併した。

豊橋市へ合併したため、「豊橋市嵩山町」と改称し、旧石巻村役場は支所となった。

石巻村は解村記念として、村の足跡を残すために「石巻村誌」を刊行した。

④ 宅地の造成

児童数の減少で、昭和37年度の小学校低学年は複式学級となった。校区では宅地を造成して就学児童の増加を期待することにした。

城山（月ヶ谷城）の南斜面5haを市に売却し、分譲住宅地として昭和42年より順次建築され178戸の「自由ヶ丘」が誕生した。

団地の北側に建設された東三河自動車検査場は、施設拡張のため神野新田に移転したので、その跡地に、平成3年に建売分譲の50戸「サンヒル嵩山」が続いて誕生した。

⑤ 豊川用水

鳳来寺山付近の峡谷に大規模な貯水池を造り、渥美半島の先端まで水路を引くという遠大な構想は大正10年に生まれたが、社会経済の混乱と戦争で実現は困難であった。しかし、昭和24年に着工以来、19年の歳月と約488億円の巨費で、昭和43年に完成通水し、東三河にとっては念願の水資源が確保された。

嵩山は当初、反対の声もあったが、豊川用水ができたおかげで給水量が増え、田畑の給水も順調になり、畑の野菜・果樹などの商品栽培も盛んに行われるようになった。

⑥ 水道の敷設

生活用水の井戸は、昭和30年代までは釣瓶や手押しポンプであったが、その後、各家庭に水道管による電動ポンプが普及した。

藤藪、中村地区は共同で浅間下の水穴から簡易水道を敷設したり、長彦の一部は裏山の湧き水を利用したりしていた。

昭和52年に、町内全域に市の上水道が敷設され、給水の恩恵が受けられた。

その後、生活様式も都市化へと変化してくると、生活排水による河川の水質悪化が深刻となり、平成20年度から下水道の整備事業が具体化する計画である。

⑦ 共同アンテナからCTT・ティーズへ

嵩山は、山間地のためテレビ電波の受信が悪く、以前は共同アンテナを利用していた。その後、全てではないが、農協の有線テレビ（CTT）を経て、平成17年に豊橋ケーブルテレビ（ティーズ）へと移行した。

2 校区の産業

(1) 農林業

田の面積は65haだが、長い間、米の生産調整で果樹園やハウスに切替えられたりして、平成15年度の稲の作付面積は、約30ha、転作面積は約22haであった。

平成16年度から、米作の生産調整が解除されて生産者の自主的経営になったため、稲の作付は40haに増えた。

しかし、水田の耕作は労働力の減少・高齢化などで、農作業のすべてを農協や個人に委託したり、田植え・稲刈り・脱穀などの作業を分けて委託するのが多くなってきた。

畑は38ha、菜園や柿の栽培が多く、柿は特産品として出荷している。

一時、乳牛・鶏・豚などの家畜の飼育も盛んであったが、生活環境の問題もあつたりして減退してしまった。

平成15年度から17年度にかけて、豊川用水のU字溝による配水が、パイプライン化によって、田畑に自由に取水できるようになり、水不足の心配はなくなった。

校区面積の78%は山林だが、山が浅く所有規模も少ないので、山の管理は農家の兼業として行われている。

山はヒノキ、スギの人工林が多いが、近年、輸入木材におされて価格が低迷したり、担い手の減少と高齢化で経営の意欲も薄くなり、昭和27年に結成した石巻村森林組合（豊橋市森林組合）も、平成17年6月に解散となった。

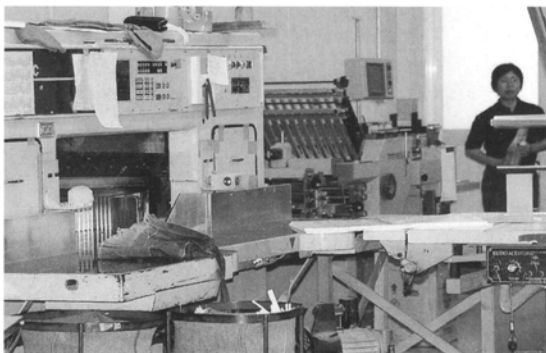
(2) 商業

昭和25年に140戸・800人であった住民は、地域の開発により55年後の現在では、約440戸・1,600人となった。住民の増加で各種商店の営業が期待されたが、近郊の大規模マーケットの影響や、車社会で行動が簡便になって、地元での営業はスーパーマーケット、喫茶、飲食、美容理髪など僅かな業種しかない。

(3) 工業

地域を代表するものに、江戸時代より続いている石灰岩の採掘がある。経営は解散・合併を繰り返したりしたが、昭和40年以降は有限会社として、今まで続けてきた石灰の製造はやめて、炭酸カルシウム・碎石・石垣石の製造を行っている。

これ以外に、平成2年、国道沿いに印刷会社が大工場を建設して、従業員51名が最新の設備と技術で、印刷関係のすべての業務を取り扱っている。



印刷会社工場内

このほか、家内工業的なもので、鉄工・自動車修理・水道工事・土木建設・壁土・板金・繊維・毛筆・精米などがある。

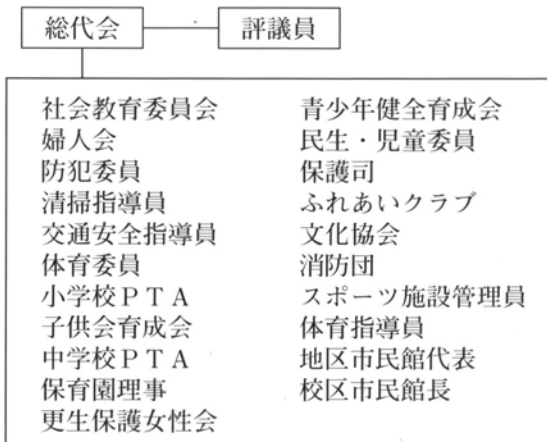
(4) その他

新トンネルの手前に、平成10年医療法人組織による介護老人保健施設が開設された。定員は100名で、ほかにディケアとして40名が収容できる。

他には、不動産の仲介や、建築設計の事務所、個人タクシーなどがある。

3 校区の活動

(1) 各種団体



(順不同)

(2) 体育活動

学校開放と運動場の夜間照明設置で、土日の昼間や、夜間は各種のクラブが活動し、隣接校区との交流も盛んに行われている。

運 動 場	サッカー	体 育 館	バレーボール
	ソフトボール		ソフトバレーボール
	野球		インディアカ
	グラウンドゴルフ		卓球
	ゲートボール		

(平成18年6月現在)

秋には、校区民こぞって小学校と合同で運動会を行い、リレー、玉入れ、綱引きなどの地区対抗競技には、声援に力が入っている。



グラウンドゴルフ

(3) 市民館活動

平成7年度に、全国自治宝くじの助成金を受け、校区コミュニティ活動の推進に必要な備品・機材を購入して、各種団体や、サークル活動で活用している。

主なサークルは、舞踊、生花、自彊術、大正琴、カラオケなどが行われている。

文化祭には、各サークルはもとより、小学校、保育園の参加もあり、作品展・芸能大会や茶席も用意して賑やかである。

(4) 納涼まつり (盆踊り)

旧盆前の土日に、納涼まつりを実施して日頃は静かな夜の広場も、この時だけは浴衣姿の人達が輪を作り、櫓太鼓に合わせて踊る賑やかな一時である。

かつては、盆の行事に「大念仏」が行われていたが、今は途絶えている。



納涼まつり (盆踊り)

(5) 530運動

毎年、春と秋の2回に、各町内全員で地域の道端に捨てられた空缶やプラスチックの容器など、ゴミの片付けを実施している。

本坂峠に向かう道路端は、森林で人目につかないためか、産業廃棄物や生活廃棄物の不法投棄が多く、大量のゴミが捨てられ、今まで時々処理をしてきた。しかし、ゴミがゴミを呼ぶ心配もあって、平成17年には、全町民に呼びかけて、春と秋に不法投棄物の回収処理を実施し、冷蔵庫をはじめ家電類・タイヤ

など軽トラックに47台分のゴミを搬出した。



不法投棄のゴミ類

(6) 敬老会・成人式

校区の敬老会は、大正8年より青年団が実施してきたが、昭和の中頃より総代会が主催してきた。平成17年は通算88回目となり75歳以上の方160名を校区市民館に招待して、長寿を祝福する宴を催した。

成人式は、毎年石巻中学校区社会教育委員会の行事として、5小学校区合同で農協の石巻支所ホールで行っている。新成人は、自分のキャンドルに点火し、中学校当時の担任より祝福と激励を受けたり、級友と語り合っ自己の人生を確かめる機会としている。



5校区合同の成人式

(7) 戦没者追悼慰霊祭

例年3月の第一日曜日に、忠魂碑の前庭で日清戦争以来、太平洋戦争が終結するまでに校区から出征して亡くなった方々の御霊に対し、白土社宮司、正宗寺・萬福寺の住職によって、神仏合同の祭祀を行い、遺族の方々をはじめ、参列者一同、改めて御霊の冥福を祈っている。

第3章 教育と文化

1 学校教育と保育

(1) 嵩山小学校のあゆみ

寺子屋から近代的な学校へ 明治の初めまで、嵩山校区（当時 嵩山村、月ヶ谷村、長彦村）にある教育の機関といえば、地区内にある4つの寺子屋であった。

江戸幕府が終焉を迎えた後、明治5年8月政府が「学制」を公布、これを受け同6年8月16日に第9中学区内第39番小学嵩山学校が開校された。嵩山で初めての学校が誕生した場所は、それまで寺子屋のあった正宗寺内の陽徳院、児童数は43人であった。

しかし、寺の建物を仮の校舎にした学校は何かと不便でもあったので、明治10年に、現在の場所に移されることになった。



大正期の嵩山小学校

その後、学区制の廃止による校名変更（明治12年・八名郡第33番小学嵩山学校）、補習科の設置（明治25年）、あるいは学校の統廃合問題（明治39年）など、国の教育制度の変遷とともにその姿を変えながら、嵩山小学校は校区と協力して子どもたちの健やかな育成に努めてきた。

嵩山小学校の歴史

年号	西暦	児童数	出来事
明治6	1873	43	嵩山学校の誕生
25	1892	141	八名郡嵩山尋常小学校となる
40	1907	110	石巻村立嵩山尋常小学校となる
大正9	1920	193	南部連合運動会
昭和16	1941	187	太平洋戦争開戦 嵩山国民学校となる
20	1945	250	豊橋空襲・終戦 児童数最大となる
22	1947	199	八名郡石巻村立嵩山小学校となる
26	1951	182	完全給食
28	1953	172	東校舎建設
30	1955	165	豊橋市と合併 豊橋市立嵩山小学校となる
31	1956	160	学校給食開始
32	1957	154	西校舎建設
41	1966	91	岩石園完成
44	1969	86	児童数が少なくなる 自由ヶ丘誕生
47	1972	106	プール完成 運動場拡張
48	1973	109	鉄筋校舎建築工事起工
51	1976	129	体育館完成
57	1982	173	鉄筋校舎完成
平成6	1994	123	大型遊具設置 家庭科室設置
7	1995	127	コンピューター室設置
13	2001	108	実習農園設置
14	2002	97	校舎南窓硬質ガラス化工事
15	2003	93	週休5日制実施
16	2004	83	各門扉設置工事
17	2005	76	2学期制採用 耐震工事 愛知万博ナショナルデー参加

一方、嵩山小学校の児童の数は、明治30年代までは尋常科は110名前後で、その後、尋常科が6年制になったため、明治42年以降は約50名ほど児童数が増加した。

昭和16年には、戦時体制に対応する皇国民の錬成を目的に、国民学校令が交付された。

嵩山尋常高等小学校は嵩山国民学校と校名が変更になり、八紘一字の精神を錬成する全体主義の教育が強化された。

戦後の歩み 敗戦後、昭和22年3月公布の学校教育法による6・3制の義務教育制度がスタートした。これにともない、今までの国民学校は小学校と名称を変更、新しく出発することになった。

昭和28年から同32年にかけて、老朽化した木造校舎の建て替えが行われて、南側の窓も2段式となり、各教室から直接運動場に出られるなど斬新な校舎となった。

昭和48年には、拡張された新しい校地に鉄筋3階建て校舎の建設が着手され、現在の駐車場北側にあった木造校舎はそのままに、翌年1月、3教室分だけの新校舎が完成した。

しかし、その後の増築工事は遅々として進まず、昭和55年ようやく第2期工事が始まり、昭和57年12月になって現在の4階部分を除く校舎の全てが完成した。



完成間近の第2期工事（昭和56年）

それまで嵩山の児童たちと歩んできた木造の校舎は、その役目を終えて、新校舎の完成

とともに解体された。児童には校舎の思い出に、瓦1枚ずつ記念として手渡された。なお、4階家庭科室は、平成6年に増築された部分である。

一方で、学校のプールは昭和47年に完成していたが、その時点でもまだ体育館はできていなかった。そのため、児童集会・学芸会などの行事は、3教室分のしきりを取り払って使っていたり、雨の日は体育の授業が中止になるなど、何かと不便であった。

そのため、校区は体育館建築を再三にわたって豊橋市に要望、陳情してきたが、昭和50年7月より体育館の工事がスタートして、翌年の1月24日に完成した。



完成した体育館（昭和51年）

立派に完成した体育館では児童たちが様々な活動に取り組む一方で、昭和51年からは夜間や休日は市民のためのスポーツ開放にも利用され、今まで適当なスポーツ施設が少なかった校区の人々が盛んに利用するようになった。

現在の運動場は、以前は私有地で、北半分は畑、南半分は湿田だった。

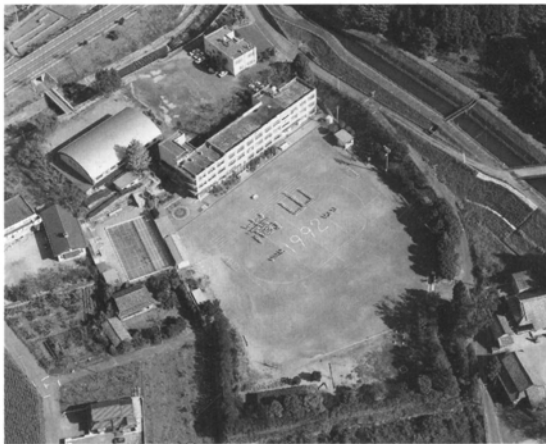
この用地は、昭和30年代の土地改良工事の時に、児童の活動のために、嵩山校区の全地主が各自の土地を少しずつ拠出して集約したところで、昭和47年に拡張のための埋め立て工事が始まった。用地の面積も広く、さらに鉄筋校舎の工事も開始されるなど諸般の事情



拡張工事中の校庭（昭和48年）

で遅れに遅れ、ようやく完成したのは工事開始より7年後の昭和54年3月であった。

かつては市内で一番狭かった運動場が、校区の人達の寄附による支援で、市内の他校より広い運動場となった。さらに昭和61年には夜間照明施設が完備され、夜の校庭開放も実現し多くの人に利用されている。



工事完成後の校舎・校庭（平成4年）

この数年間に、不審者侵入防止のために扉を付けたり（平成16年）、懸念される東海地震に備えて校舎耐震工事が行われたり（平成17年）と、時代の変遷とともに学校も児童の安全管理に配慮を行っている。

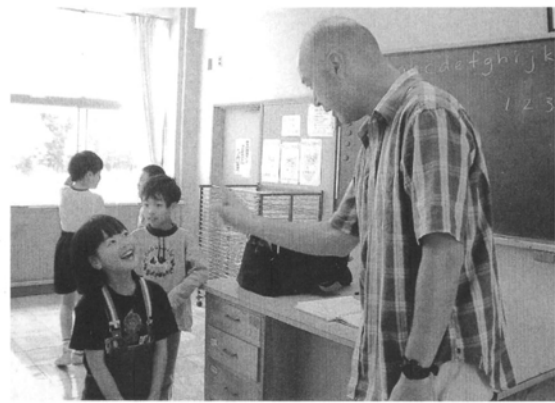
(2) 嵩山小学校の活動

21世紀を迎えた今、学校教育のあり方も週5日制、総合学習、2学期制と、大きくその姿を変えようとしている。

英語活動 児童たちに、国際的な感覚を養う一つの方策として、英語に関心を持たせたいと平成12年度より嵩山小独自の英語への取り組みを始めた。

3～6年までの各学年に配分されている「総合的な学習の時間」年間105時間のうち、約20時間を英語学習に充てて、講師は外国人（カナダ）の先生を招聘している。

気楽に英語に接してほしいという願いから、授業は会話形式が中心で、楽しみながら学ぶことができるようにゲームなどを取り入れている。月に2回の英語の時間には、児童たちの元気な声が教室中を飛び交っている。



ゲームをしながら、楽しく英会話

図書室にコンピューター 学習活動、情操教育など、児童たちを育む環境を豊かにするため学校図書館の充実に努め、現在、嵩山小図書館の蔵書数は4,041冊。放課の時間や雨の日には、校舎2階にあるこの部屋で読書を楽しむ児童たちの姿が見られる。

従来、児童たちの読書といえば、絵本や物語、ノンフィクションといった読み物が主流の時代が長く続いた。しかし、学習指導要領の改訂や「総合的な学習」の導入など新しい時代の風を受け、その傾向にも少しずつ変化が現れて、図書資料も調べ学習に適したものが増え、隣のコンピューター室とともに児童の関心・意欲が解決できるよう学習センターの機能の充実に努めている。

平成17年度からは全市一斉に図書館コンピューターが装備され、やがて全国の公共図書館とも瞬時に情報交換ができる日も近い。

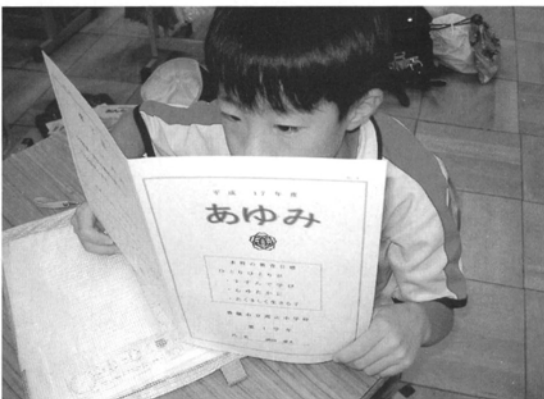


図書の貸し出しもコンピューターで

2学期制の導入 豊橋市は、石巻中学校区内の各小学校ほか市内数校を2学期制の先進校に指定した。嵩山小学校も平成17年度から新しいカリキュラムを組み、1年間で前期・後期の2つの学期に分けた学習活動を展開し、より効果的な学校運営の進め方の研究に取り組んでいる。

2学期制の終業（修了）式は10月と3月になる。夏休みは8月下旬に終わり、代わりに短い秋休みが10月に入る。

この制度の導入により、年間30時間程度の時間増がみこまれ、授業時間の確保が図られた。また、一つの学期が長期に渡ることから、より大きな単元を組むことができるようになった。そのため、指導の継続が図られ、児童



どんなかな？2学期制初めての通知票「あゆみ」

たちはじっくり学習活動に取り組めるようになった。

地域の高齢者より様々な知恵や技の指導を受ける「古老に学ぶ会」、米作り学習や平成10年度より校区との合同運動会など、多くの行事活動の実施により、地域の人たちとの交流を深めている。

(3) 嵩山保育園のあゆみ

働く母親に代わって、学齢期前の幼児たちの保育の場として、昭和28年6月、嵩山小学校の一部を借用して保育園が開園した。

運営は、嵩山の各地区から選ばれた7名の委員によって行われた。

初代の園長は後藤一男、保母4名、給食員1名、園児の在籍は61名であった。

昭和33年、宮下78番地の現在地に木造平屋建ての園舎が新築された。



旧園舎 昭和33年完成

その後、昭和43年になって社会福祉法人豊橋市社会福祉協議会に運営が移管され、他校区の保育園と連携して活動の充実が図られるようになった。

さらに、昭和46年には豊橋市北部保育事業会に包括された。

園児の安全保育を期するため、昭和51年に鉄筋2階建て園舎への改築工事が始まり、翌年完成。続いて昭和54年にはプール、58年には遊戯室が完成し、保育園の施設が整備されてきた。

一方、園児の数は、昭和57年までは80人以上であったが、徐々に減少傾向となり、平成に入ると、50人に満たない状況となり、少子化の現在（平成18年度）は、47名が在籍している。



ふれあい広場（子育て支援）

働く母親に代わって子どもの健全な保育を担っている現在も「心身ともに健やかに、自然に親しみ、思いやりのある子どもの育成」を目標に、さまざまな活動を展開している。

リズム遊び、粘土の造形、プール遊び、焼き芋会、ウォークラリー、ケアハウスのお年寄りとの交流など、楽しく活動することで、いつくしみ、思いやりなど、いろいろな能力の育成を心掛けている。また、地域に対しても「ふれあい広場」、「一時保育」など、子育ての支援活動も積極的に実施している。



現園舎 昭和52年完成

2 社会教育

(1) 八名郡教育会

明治28年（1895）6月、八名郡役所学務係本多述は富岡に郡内の町村長と小学校長を集めて、教育界改造について提議した。

改造の要旨は、「教育活動は学校教育以外にも指導啓発を要請する」というものであった。

これを受けて翌年5月には八名郡教育義会が創立され、地域の人たちに学校教育への関心を深めさせるとともに、家庭教育のあり方や青少年の活動にも目を向けさせるために巡回講話が各地で開催された。

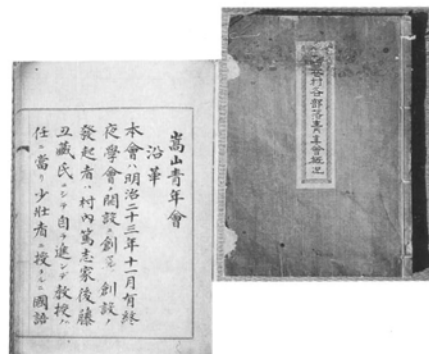
明治39年に教育義会は教育会と改名、その後、活動の充実促進のため、石巻村は大正5年1月に石巻村教育会を設立した。しかし、県は大正9年に自治会としたため、仕事は学校教育と青年会・処女会の後援だけとなった。

(2) 嵩山青年会

旧嵩山には「蛇連」という青年の組織があって、15歳より25歳までの男子は必ずこの会に加入する風習があった。

この蛇連の青年を対象として青年会が設立されたが、大正3年の石巻村各部落青年会概況には、嵩山青年会の沿革が次のように記されている。

「本会は明治23年からの夜学会の開設に始まり、発起人は後藤丑蔵で、自ら進んで教授



嵩山青年会の活動（石巻村各部落青年概況より）

の任にあたり、国語・漢文・作文・算術を20年間教えた。明治43年に嵩山青年会と改称し、現在に至る」

青年会の当時の会員は53名で、夜学は農閑期の12月より翌年の3月までの4カ月間、週6回、毎夜2時間行われた。学校教員・神官・徳望家が教え、教科書には十六史略が使用された。

(3) 月ヶ谷青年会

嵩山の蛇連に対して月ヶ谷にも、「月盛舎」という青年の組織があった。明治9年に嵩山村と合併しても地域的に離れていたり氏神が別だったりしたため、活動は分かれていたが、互いに連絡は取り合っていた。

明治28年に、月盛舎の組織を改正して青年団として、農作振興のため水稻の試作をしたり、農閑期に毎週3回、国語・漢文・算術の夜学会と、月1回の話し言葉の練習をかねた談話会を開催したりしていた。

(4) 嵩山処女会

大正8年1月、石巻教育会の指示で、嵩山校区在住者で小学校卒業後結婚するまでの女性によって処女会がつけられた。

女性として品性を高め、知識技能を養い、良妻賢母としての素地をつくることを目的として、管理体制の枠をはめて組織した。

主な活動は、献穀田の苗代作りから収穫までの世話をはじめ、入営除隊時の歓送迎の行列行進に参加したり、裁縫や書道の作品展を、青年会の農産物品評会と一緒にしていた。

(5) 青少年団

満州事変・日中戦争と、戦時体制が続いてくると、国民の士気高揚と団結のために、今までの体制の見直しが行われ、昭和16年に、青年会・処女会などを一括して、官制の青少

年団が作られ、国民学校長が団長を兼任することになった。

戦局が厳しくなると、勤労作業に繰り出されることが多くなり、山林で燃料作りや開墾をして食糧増産に励んだり、出征家族・遺族家庭への手伝いなども、区の人たちと一緒に出かけたりした。

昭和20年8月、終戦と同時に活動は止まり、占領軍司令部の勧告によって青少年団は解散となった。しかし、村の組織としては続いてきた青年会はそのまま残ったが、青年層の在村者が少なくなり、さらに祭りの行事の出番もなくなってしまったため、村全体の青年団は解散し、その後は各区で青年の出番があれば役割を考えるなど、区にまかせられるようになった。

(6) 報徳社

大正11年度(1922)より玉川小学校に併設されていた農業補習学校に、昼間部が設置され、これが後の石巻公民学校となった。

この公民学校初代の鈴木繁尾校長は、二宮尊徳の教えである「報徳」の遵奉者であった。

校長は報徳の精神を学校だけでなく、村民にも「分度推譲・勤儉貯蓄・親睦協和」の心を持つことを力説していた。

各小中学校に、薪を背負った読書姿の二宮尊徳像が見られるのは、ただ勉学の教えのためだけでなく、地域の人たちにも、報徳を忘れないようにとの願いがあったのではなかろうか。



二宮尊徳像 小学校校庭

嵩山の報徳講は、集落ごとに結成されて全戸が加入していたが、これによって報徳運動が強化されたのではなく、各自が共同意識をもって互いに助け合いの気持ちを確認するものであった。

(7) 社会学級

石巻村に社会教育委員会が設立されたのは、昭和23年(1948)7月で、村内関係団体の代表者や学識経験者の中より、15名を村長が選任して発足した。

嵩山は、石巻村社会教育委員会の指示で、社会学級を開設し、農閑期に小学校で講演会・映画会が開催された。社会学級は、年間5回開かれ、内容は戦後の対処を中心に、資源再生・食生活・衛生関係の講話が多く、映画は人情劇で、娯楽の乏しい時だけに、人の集まりはよかった。

昭和30年、豊橋市に合併したので、豊橋市校区社会教育委員会連絡協議会に包含されることになったが、活動は新鮮味に乏しく、次第に低調化していった。

(8) コミュニティ活動

昭和52年に石巻地区市民館が開館し、地域の人たちの対話交流をより深める場として、いろいろな行事やサークル活動が始まった。これを機会として、石巻中学校区コミュニティ推進委員会が発足した。

昭和56年度に県教育委員会より、石巻中学校区が「家庭教育推進モデル地区」の研究指定を受けることになった。研究の主体をコミュニティ推進委員会で引き受け、この会で家庭教育問題に取り組むことになった。

実践主題を「育てよう 明るい家庭を ふれあいで」と決め、従来の校区の行政組織を基盤として、①ふれあい②あいさつ③美しいまちづくりの3項目を決め、活動の具体化が

図られた。各小学校区単位でも、役員・担当者による地域への啓発・徹底が図られ、その成果は年度末の研究発表会で高く評価された。

このようにして出発したコミュニティ活動は、現在も継続されており、事業は多少変更されているが、前年度の反省と新年度の方針を確認して、校区の各種団体をはじめ、各サークルも、活動を通して連帯意識の深まりと協調の輪を広げている。



市民館講座「嵩山探訪」

3 社寺と文化財

(1) 神社

白土社 (しらつちしゃ)

祭神 おこなむちのみこと おおくにぬしのみこと にとくてんのう 大己貴命 大国主命 仁徳天皇

境内社 しんめいしゃ ちへんじんしゃ いなりしゃ まいれいしゃ 神明社 池辺神社 稲荷社 英霊社

宝物 わにぐち 鱈口 (市指定文化財)



白土社

創建は嘉暦年間(1326~1329)と伝えられ、

神社名の白土とは地域内にある石灰岩に関係があり、採掘した石灰岩を竈で焼いて得られた石灰を別名白土と呼んでいたことによる。現存する棟札の最古のものは天正6年(1578)の法華曼荼羅様式で中央に「南無妙法蓮華經、南無日蓮大聖人日扇」、上方左右に四天王はじめ多数の神仏名を記し下方右側に「奉勸請白土大明神鎮座所」とあり、裏面には「地頭西郷孫九郎家員、同陰居、左衛門助吉員」とある。慶長6年(1601)には伊奈備前守から神領3石を受領している。明治40年に日吉神社(字北山57鎮座)、若宮社(字北山68鎮座)を合祀した。

宝物の鰐口は、この地方では珍しい鉄鑄製で「三州八名郡嵩山之郷白土大明神願主太郎兵へ天正廿壬辰十二



鰐口

月吉日」の陽刻銘があり天正20年(1592)寄進されたもので、平成元年に豊橋市有形文化財に指定された。境内の回り舞台付き芝居小屋は明治時代に建てられた。

長孫天神社(おさひこてんじんしゃ)

祭神 少彦名命

境内社 山神社 若宮社 水神社

宝物 鰐口(市指定文化財)



長孫天神社

創建は養老3年(719)と伝えられ、神社名は慶長6年(1601)に伊奈備前守から神領3石を寄進された黒印状には長彦大明神神立とあり、最古の棟札である寛永2年(1625)には大明神とあるだけである。その後、江戸時代のすべての棟札には是大明神と記されている。羽田野敬雄が天保5年(1834)に書き写した「猿投社本參河国内神明名帳」には「正五位下長孫天神坐八名郡」とある。

社殿の内陣は二社造で、社伝では古来左の方が石巻大明神、右の方が榮宮大明神とのことである。したがって祭礼に立てる幟も、普通その神社の名前が書かれるのであるが、本社では左側に「石巻大明神祭礼」、右側に「榮宮大明神祭礼」と記されている。石巻大明神の名前が書かれているのは、石巻神社の奥の院が本社で、さらに本社の奥の院が北山に鎮座する錐野御前であると伝承されているからである。



幟



鰐口

石巻神社には末社が40余社あったといわれているが、寛保元年(1741)の領主松平豊後守への届出には18社とあり、内訳は高足村1社、神ヶ谷村4社、長彦村2社、神郷村10社、牛川村1社とある。この長彦村の2社が現在の長孫天神社の内陣に鎮座する石巻大明神と榮宮大明神ともいわれている。さらに、応仁2年(1468)2月から永禄5年(1562)の「石巻宮織女帳之事」には、神ヶ谷、多米、

ながら、^{ながら} 長榮、^{わだ} 和田、^{げじょう} 下条、^{たかい} 高井、^{わらがや} 嵩山、^{なみ} 月ヶ谷、^浪 浪ノ上の各村が毎年2月に奉仕しているが、石巻神社の直氏子である神郷、^{かなだ} 金田、長彦は含まれていない。長彦が別格の扱いを受けていたのは旧暦正月14日15日の^{くだがゆしんじ} 管粥神事に、かやの箸42膳を納めるのが古例となっていたなどの関係かと思われる。

榮宮大明神の伝承では、北朝方から身を隠していた後醍醐天皇の孫の^{もりなが} 守永親王が錐野と名乗り、中国の南北朝の「宋」の国の繁栄にあやかるため、南朝を宋にたとえて北朝の目を欺くため、宋の字の上に草冠を付けて隠し南朝にしたという。

特殊な神事として祭礼では、両座内陣に、昔から使用してきた栗の盆に三つの椀を載せ各6台ずつの^{しんせん} 神饌を供える。一椀には白飯を山盛りにして、その上に楕円形に伸ばした餅を石巻大明神へは3枚、榮宮大明神へは2枚載せる。浅い一椀には人参、牛蒡を小短冊に切ったものに食塩をかけ、平たい大椀には三才鱈一尾ずつ盛り、柳箸を添えて計12膳を供え、その前方へ御食、御酒などを供える。



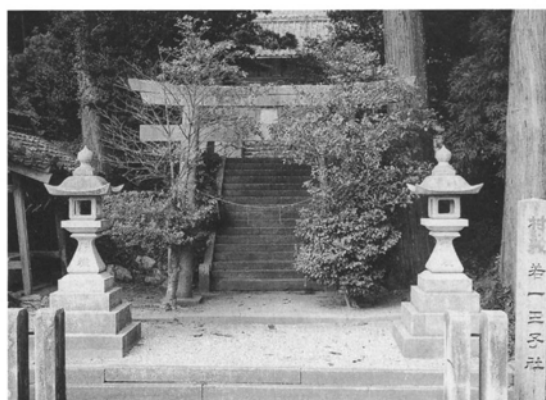
内陣への神饌

宝物に青銅製の鱧口があり、「刑部御厨内清福寺打響 明德三年壬辰十月日 願主小野長吉」の陰刻銘がある。^{おしかべみくりや} 刑部御厨は現在の静岡県浜松市細江町付近と推定されている。これは元来当社の鱧口ではなく明德3年(1392)に小野長吉が刑部御厨の^{せいふくじ} 清福寺に寄進し、そ

の後、当社に移ってきたものと考えられる。本鱧口は豊橋市内では最も古く貴重なもので、平成元年に豊橋市有形文化財に指定された。

若一王子社 (にやくいちおうじしゃ)
通称：じゃくいちおうじしゃ)

祭神 ^{ひるのみこと} 蛭子命
境内社 ^{みよしのじんじや} 三吉野神社 ^{くまのじんじや} 熊野神社 ^{てんのうじんじや} 天王神社
^{おくわしや} 御鋤社 ^{てんじんじや} 天神社 ^{みたましや} 御霊社
宝物 神像 ^{けいごうずてんじんえま} 繫牛図天神絵馬



若一王子社

創建は天平7年(735)と伝えられ、慶長6年(1601)には伊奈備前守から^{こくいん} 黒印2石を拝領した。神社名は熊野十二所権現の一つである若一王子に由来しており熊野系統の古社である。現存する棟札の中で一番古いものは、文明6年(1474)のもので嵩山にある神社の中で最も古く、その棟札にはそれ以前にあった文永2年(1265)など4回の修復・遷宮も含めた記録が墨書されている。この棟札には「嘉慶二戊辰十二五上葺 施主古河左近将監藤原朝臣光忠同芳縁」とあり、嘉慶2年(1388)から別の棟札の明応10年(1501)まで、さらに近世のほとんどの棟札や萬福寺の文化11年(1814)の^{ほうぞう} 宝蔵棟札にも古河(古川)氏が^{だい} 大檀那あるいは神主として記されている。このことから、古河氏は永く地域の社家であったか、または地域の支配にかかわった一族であったかとも思われる。月ヶ谷の山際地区に「(古河)九太夫」という屋敷跡と、墓地に古

河家の墓石跡がある。

境内社である牛頭天王ごずてんのうを祀る天王神社は字八ッ面やっめんにあった八面天王を、明治初期に移祀され、末社殿に残る長さ1間（1.8m）もある大筒から、かつては盛大な天王祭が行われていたと推測される。最近まで天王社の大祭日には、子供たちが花火を奉納していた。また、天神社は空ノ池てんじんいわの北の天神岩から、御鋸社ごのこぎは天神沢てんじんざの二本杉跡から移祀された。

宝物の神像は平安末期の一本造りで像高70cm前後の隨身像で大変珍しい。拝殿前の狛犬は豊橋最古のもので、大正3年（1914）に境内の鳥居・燈籠など石造物すべてが奉納された時のものである。天神社には寛永2年（1625）10月奉納の金箔地の繫牛図天神絵馬がある。



天王神社と大筒



神像

浅間神社（せんげんじんじゃ）

本社は天平勝宝2年（750）に駿河の富士浅間神社から勧請したと伝えられ、頭浅間（大山社）、腹浅間（原川社）、足浅間（富士社）の三社三祭神から成っており、近世には浅間三社あるいは三社浅間と呼称され、近在近郷から深く信仰されていた。しかし、明治41年（1908）に大山浅間社を原川社に合祀して、二社三祭神とした。祭礼は従来7月31日から8月1日であったが近年7月末の日曜に変更され「嵩山の浅間様」といわれ崇拝され

ている。頭・腹・足の疾病に効くといわれ、祭礼の日には頭浅間には大黒頭巾、腹浅間には腹掛、足浅間には脚絆と、お礼参りの品々が神前の大榎に吊るされる風習がある。氏子である旧嵩山各集落では、大祭日にはそれぞれ幟を立てる。

① 原川社（はらかわしゃ）

祭神 木花咲耶姫命このはなさくやひめのみこと 大山祇命おおやまづみのみこと

② 富士社（ふじしゃ）

祭神 秋津姫命あきつひめのみこと

(2) 寺院

正宗寺（しょうじゅうじ）

山号 嵩山すうざん

本尊 釈迦如来しゃかにょらい

宝物 長澤蘆雪筆旧方丈壁画（国指定重要文化財）
 釈迦三尊画像 伝狩野正信筆四皓の図 伝狩野元信筆花鳥山水図（以上、県指定有形文化財）
 円山応挙筆龍虎図 伝兆殿司筆涅槃図 白隠筆達磨図 霊山会図（以上、市指定有形文化財）



正宗寺山門

創建は鎌倉時代の永仁年間（1293～99）と伝えられ、中国の宋から渡ってきた日顔にちがん禅師が、当地の地形が達磨大師に縁の深い魏の少林寺畔の嵩山すうざんに似ているので山号を嵩山と名付けた。寺名は日顔が学んでいた杭州の天目山獅子正宗禅寺をそのまま寺号としたといわれる。以来、寺は繁栄の一途をたどり室町時

代には山内に四本庵・十二院の塔頭^{たつちゅう}があり、末寺も六十カ寺を超え宝飯郡御津町や静岡県・岐阜県にも及び、三遠国境を挟み、遠江の奥山方広寺と並んで、法運の隆盛を誇り、大いに禅風を高めていた。その後、戦国時代の混乱期に、西郷氏領内での戦で全山が焼失する被害を受けたが、その都度、領主西郷氏の援助によって、大永8年(1528)と永禄10年(1567)に再建が行われた。

慶長8年(1603)お愛の方が西郷氏の出身で、正宗寺が菩提寺ということで、家康より朱印36石を拝領した。お愛の方は、後の西郷の局で二代將軍秀忠の生母である。

本寺は中世から江戸期を通じて火災や山津波に遭い天明5年(1785)に現在地に移された。その後も火災に遭い、特に文化2年(1805)の火災では全ての建物を灰燼に帰してしまっている。しかし、幸いなことに障壁画の類は難を免れた。現在の建物の内、客殿・書院・庫裏・開山堂・禅堂・鐘楼などは江戸末期の安政2年(1855)に建てられたものである。建坪600坪(約2,000m²)を誇る本寺は三河三刹の一つに数えられている。こうした威光を示すためか、大正13年(1924)に京都建礼門を模した唐門を建設し、表扉は徳川家の三葉葵、裏扉には西郷家の作鷹羽で飾った。

本寺には古来より三十六溪谷といわれる多くの沢を背後の山中に持ち、「嵩山十二景」と呼ばれている景勝地がある。

本寺は円山応挙^{まるやまおうきよ}の高弟であった長澤蘆雪^{ながさわ りうせつ}(1754~99)の作品を数多く所蔵し、別名「蘆雪寺」とも呼ばれている。これらの作品は江戸時代中期に本寺再建に力を注いだ第十一世万年和尚^{まんねん}の交友関係から描かれたもので、豊橋には小松原町の東観音寺^{とうかんのんじ}などにも作品が伝えられている。宝物としては国指定重要文化財である旧方丈障壁画42幅附3幅をはじめ、県指定文化財である釈迦三尊画像や市指定文

化財である江戸時代中期の臨濟宗の高僧白隠^{はくいん}が描いた達磨図など多くの文化財を所蔵している。



日顔禅師

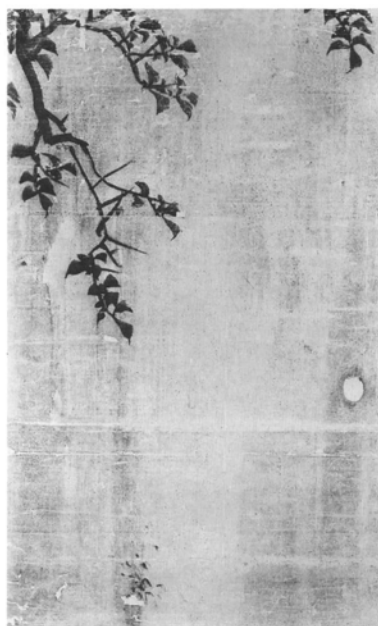
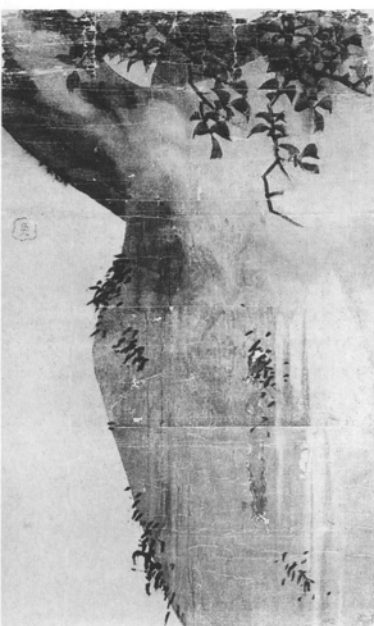
長澤蘆雪の落款・印

① 長澤蘆雪筆旧方丈壁画(国指定重要文化財)
ア 波涛図 12幅

旧方丈障壁画45幅の中でも特に優れており波を描いた12幅の大作である。その奇抜さ・大胆さは師の応挙を圧倒している。雄渾な筆触で近景の渦巻く大波や岩礁に押し寄せる波が、遠景に向かうに従って小さな波となり、やがては雲間に消える様子を描き、巧みな奥行きと広がり表現するように配慮されている。決して重苦しい印象を与えず、むしろ軽快であり爽快ですらある。これは、方丈の中心である室中の間と仏間を飾る目的で描かれたものと推定されるが手引跡が無いことから一度も襖仕立てにならず現在に伝わったものである。

イ 楠^{くすのき}に鶴^{つる}図 8幅

楠図4幅と鶴図4幅は、鶴図左端の1幅の上方に楠の小枝が描かれていることにより、両図が関連しているものと分かる。楠図は左から3幅全体に大きく墨色で塗り潰した楠の巨幹を描く、いかにも蘆雪らしい意表をついた図柄で引手跡があり使われていたことが分かる。鶴図は羽を収めて遊歩する親鶴に、羽もまだ整わない雛を数羽配したもので、丹頂の特徴である頭部に朱を施してある以外はす



楠 図

べて墨描で力強い筆触で、親子の情愛の姿を描いている。

なお、楠図右端の垂れ下がる枝に1羽のキツキらしい鳥が描かれ、その下に「孝」と「敬」と読める方印が押されている。寺伝によれば、応挙一門の吉村孝敬(1769~1836)が東下りの途中に正宗寺に立ち寄り、揮毫の求めに応じようとしたところ、すでに同門の蘆雪の作品が数多くあることを知り、楠の枝に鳥のみ描き東観音寺に向かったといわれている。

ウ 花鳥図 8幅

季節は晩春から初夏にかけての時期で、右面より薄紅の花をつけた桃に雀、鳩と紅躑躅と藤、白木蓮と小鳥、淡紅の薔薇と呷々鳥を描き、中空より池畔に向かって舞い降りる数十羽の雀の群れを描いている。

エ 蘭亭曲水図 8幅

中国の東晋の永和9年(353)春3月3日、書聖の王羲之が会稽山陰の蘭亭に名士41人を招き、祓禊の例を行い、曲水に觴を流したという流觴曲水の宴の故事に基づき、その情景を写したもので蘆雪の氣質がわかる。

オ 西園雅集図 6幅

西園雅集とは、平安時代の大江定基が落飾して宋に渡り、円通大師の号を受けて当代の文人墨客達と交わっていた。ある日、西園に

あつて16人が雅宴に興じていたが、定基の円通大師もその一人であったという故事に基づいたものである。これを北宋の書画家米元章が「西園雅集図記」として著したが、本図はこれを忠実に絵画化したものである。明治26年(1893)の「宝物並什物明細帳」には西園雅集図8幅と記録されている。

カ 羅漢図 3幅

羅漢は、始めは悟りを開いた仏弟子に対する尊称であったが、わが国では広く仏道修行者の群を指して羅漢と呼んでいる。前記「宝物並什物明細帳」には、羅漢図は6枚と記されている。また、これらとは別に、蘆雪筆の「隻履達磨図」「仁王図」などが大正3年(1914)に寺を離れたが、「仁王図」のみが寺に帰った。この「仁王図」が現在の「金剛力士図」である。「隻履達磨図」は現在、市美術博物館所蔵となっている。

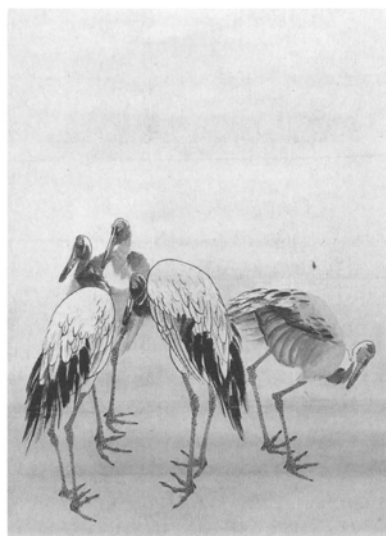
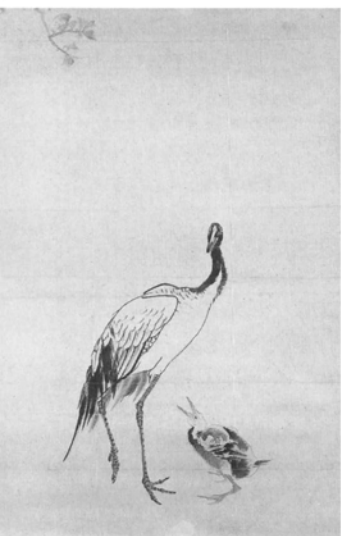
② 釈迦三尊像(県指定文化財) 3幅

日顔禪師が中国より持参し、特に秘蔵される品の一つで、禪師はこの三尊仏を本尊として創建した。岩上の草座に坐した釈迦を中心に、右に文殊、左に普賢を描いた三尊形式の仏画として格調高い。

③ 伝狩野正信筆四皓の図(県指定文化財)

1幅

正信(1434~1530)は狩野派の始祖である。



鶴 図

四皓とは秦の始皇帝の時代に戦乱をさけて商山に隠棲した四人の老高士のこと。いずれも鬚眉が白いことから四皓と称した。水墨を主とし、これに青墨を加え、額面や手に軽く黄土色を用いて画調を和らげている。

④伝狩野元信筆花鳥山水図（県指定文化財）

1 幅

狩野派の始祖である正信の長男にあたる元信（1476～1559）の花鳥画である。漢画風の墨線に鮮やかな着色を施すなど、「古法眼」と称された元信の特徴的な様式を示している。箱書より天明7年（1787）に没した京都妙心寺の斯経和尚の秘蔵の品で、その遺言により旧友の万年和尚へ寛政2年（1790）に贈られた。

⑤円山応挙筆龍虎図（市指定文化財） 2 幅

円山応挙（1733～95）は狩野派の技法を学び新しい写生画風を創造し円山派の開祖となった。年紀により安永3年（1774）に描かれた双幅で、右幅はたらし込み技法で表現された暗雲立ち込める天空に鋭い目をして下方を窺っている龍が描かれ、左幅は風が吹きすさぶ中で前足をそらせ首を上に向け龍を睨みつけている虎が描かれている。箱書から、作画された翌年の安永4年12月に、万年和尚が表装して、当時最も重要視されていた事がわかる。

⑥伝兆殿司筆涅槃図（市指定文化財） 1 幅

釈迦の臨終の情景を描いた涅槃図で古い形

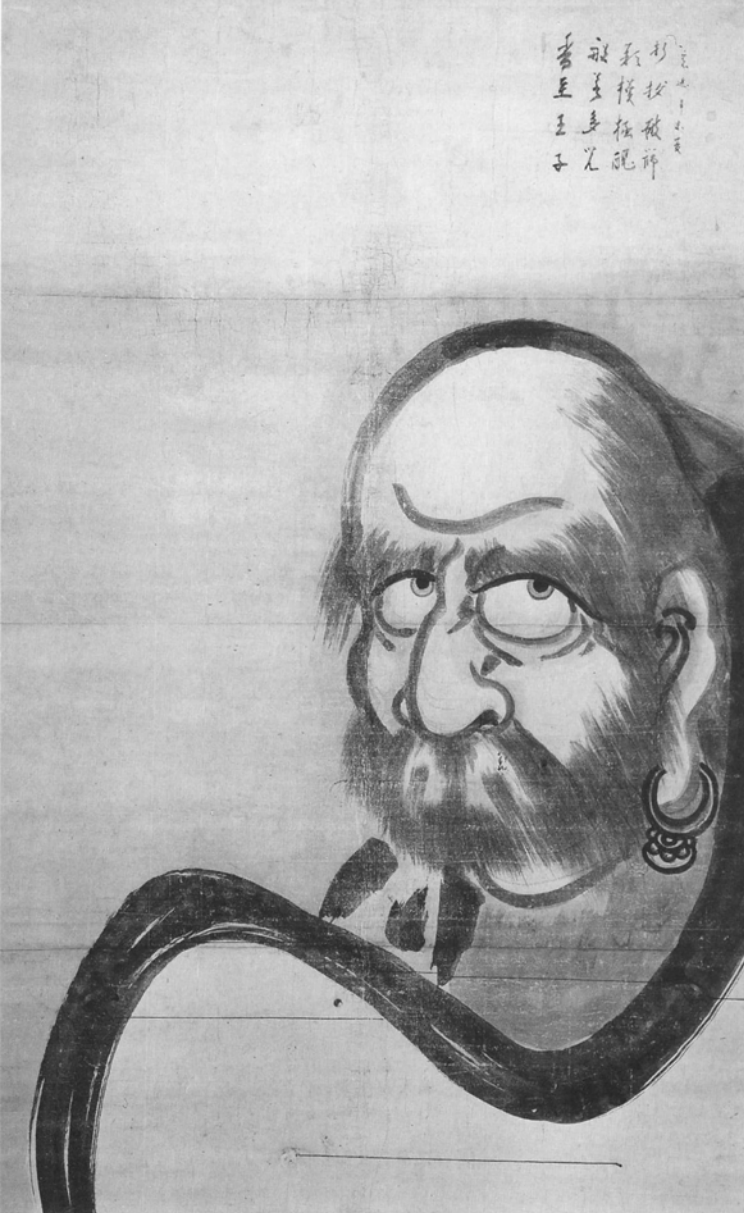
式の要素が随所にみられる。仏弟子独特の嘆きの身振りや、墨隈を強調した生き物のようにうねる沙羅双樹などの個性的な表現も目立ち室町時代のものである。兆殿司は通称名で室町時代に活躍した京都東福寺の画僧・明兆（1351～1431）で頂相や仏画を描いた。画幅は天亮斎なる者が寄進したと伝えられ、永禄10年（1567）に亀安和尚、元文元年（1736）に万設和尚、さらに大正5年（1916）には松洲和尚が再修補したと裏書に記されている。

⑦ 白隠筆達磨図（市指定文化財） 1 幅

白隠（1685～1768）は、江戸中期の高僧で、晩年に至るまで諸国諸寺を巡錫し、禪の布教に尽力した臨済宗中興の祖である。寛延4年（1751）、岡山の少林寺などを訪れた白隠が京都の妙心寺の養源院で「碧巖録」を講義し、駿河の原への帰途、本寺を訪ねて請われるままに描いたといわれている。白隠67歳の時の大作である。大画面に重厚な気迫をみなぎらせて描かれたこの達磨は、白隠独特の画風が確立された頃の名作であり、数ある白隠達磨図の中でも最大のものである。

⑧霊山会図（市指定文化財） 1 幅

釈迦如来が霊鷲山で説法を行う情景が、暗紅に染められた麻布地に、金泥線を主体とする独特の様式で描かれた朝鮮季朝時代の仏画である。中央の蓮華座上の釈迦は、右手を膝前に置く降魔印を結んでおり、手前で合掌す



達磨図

る四菩薩、背後の涌雲中に十六羅漢が様々な方向を向きながら居並び、説法に耳を傾ける構図となっている。

萬福寺（まんぷくじ）

山号 月谷山

本尊 釈迦如来

宝物 阿彌陀如来坐像（県指定有形文化財）
大般若經六百卷

創建は正宗寺を開いた日顔禪師の三代の法孫大模範和尚によって、南北朝時代の初期、貞和5年（1349）3月に開山した。山号の月谷山は旧村名の月ヶ谷村に関係するが読みは「げっこくさん」である。本尊は秘仏で御開帳は三十年ごとである。慶長6年（1601）には伊奈備前守より古跡と認められ寺領2石を拝領した。白隠門下の天壽和尚をもって中興開山一世とし、三世真宗の時代には、山門・



萬福寺山門

経堂・阿彌陀堂・土蔵などが新設され、文久2年（1862）には、豊川北金屋村の中尾重衛門と牛川村田中新田の松坂兵衛門により大般若經六百卷が奉納された。

寺の築地塀からなまこ塀に沿って曲がれば、松平頼救（1756～1830）筆の「月谷山」の額を掲げた山門の前に出る。さらに境内に入り本堂正面には、真宗住職が旧知の仲であったことにより八代將軍吉宗の孫で老中首座の白河藩主松平定信（1759～1829）「白河の楽翁」が、文化2年（1805）に揮毫した扁額「萬福寺」がある。



松平頼救筆「月谷山」扁額



松平定信筆「萬福寺」

文政3年(1820)の「地藏尊詠歌 吉田近辺三十六所」には「長き夜の 空吹く風に 雲晴れて 光さやけき 月ヶ谷の寺」と詠まれている。境内には阿弥陀堂「無量閣」はじめ、宗偏好みの茶室や月ヶ谷高札場跡の南東の十王道沿いにあった寛政11年(1799)建立の十王堂、文化8年(1811)建造の稲荷堂などがある。

宝物は格天井の阿弥陀堂内に安置されている県指定文化財である寄木造りの阿弥陀如来坐像である。口碑では月ヶ谷山の南面山中で、市場からの東光寺道沿いの山中にあった管絃



阿弥陀如来坐像

堂が、火災の時、本寺に移したものと伝えられている。これを裏付けるように石巻神社由来書には「石巻裏之鳥居月ヶ谷ニ立也今杉檜計也由緒有之也是茂根本阿弥陀如来也堂寺破損仕後者如来計居住也其以後月ヶ谷地方萬福寺境内挽近阿弥陀如来居住有」とある。この像は像高115cm、膝張り84cm、肩幅45cmで藤原期の作と推定され、胎内背面に建治2年(1276)に修復したと記した墨書銘がある。衝立の花鳥図は、四条派の原田圭岳が天保4年(1833)に描いたもので、本寺にあるのは初期の作品である。他にも狩野常信筆六歌仙屏風はじめ福田半香筆山水襖絵、伝兆殿司、吉村孝敬、小笠原華文、富田溪仙など多くの書画を所蔵している。

十輪寺(じゅうりんじ)

山号 長孫山
本尊 観世音菩薩
宝物 地藏菩薩立像



十輪寺

創建は不明であるが、寺伝によれば永和2年(1376)に示寂した虚庵座元が開基となり、正宗寺の二世方外和尚を勧請開山としたとある。山号は旧村名の長彦に関係する長孫山と書き「おさひこさん」と読む。本来、集落名も「おさひこ」であったものが、いつのまにか漢字の字面から「ながひこ」に転化したと思われる。慶長6年(1601)には黒印3石を拝領しているが、創立から現在まで幾度となく



地藏菩薩立像

無住となったこともあり記録が失われている。

宝物としては、本堂西側の地藏堂に地藏菩薩立像が安置されており、古くから7年ごとの開帳仏となっている。檜の寄木造りで像高70cm、眼や白毫に玉を用い、全体に室町期から江戸初期の特徴を示している。古来より授乳不足の女性参拝者が多い。正宗寺に所蔵されている慶応年間（1865～68）の「嵩山末山寺籍本山提出控書」や「長彦十輪寺壁書」によると、地藏菩薩立像は昔、大和汲峠（大知



大知波峠廃寺跡

波峠つまり長彦峠) にあった寺が兵乱によって焼け、荒れ果てたので、立像だけが十輪寺に降りたと記されている。慶長6年（1601）に伊奈備前守忠次は巡視の際、その由緒によって十輪寺に3石の黒印を与えたという。現在、これが大知波峠廃寺と十輪寺を結ぶ唯一の伝承である。廃寺は平成元年からの発掘調査により多くの伽藍跡が発見されており、その中には立像があったと思われる方三間の堂の礎石跡もある。「地藏尊詠歌」に「十輪寺のぼりて見れば一輪の月は心の空にとぞすめ」とある。

普門寺（ふもんじ）〈廃寺〉

山号 竹筥山

宝物 墓誌銘（現在、正宗寺蔵）

市場の南の観音山にあった寺で、幕末には観音堂のみであったが、明治のはじめ廃却して正宗寺に移した。漢文七百字余の墓誌は、天和3年（1683）に菩薩戒比丘覚本僧が白翁道泰和尚のために撰文したものである。

(3) 文化財

嵩山校区の指定文化財は表のとおりである。

	種別	名 称	所在地	指定年月日
史跡	国	嵩山蛇穴	字浅間下92	昭和32年7月1日
	市	萬福寺古墳	字奈木11	昭和50年1月21日
有形文化財	国	旧方丈障壁画長澤蘆雪筆42幅附3幅	正宗寺	昭和56年6月9日
	県	釈迦三尊像 3幅	正宗寺	昭和30年6月6日
	県	木造阿弥陀如来坐像 1軀	萬福寺	昭和48年4月4日
	県	伝狩野正信筆四皓の図 1幅	正宗寺	昭和48年11月26日
	県	伝狩野元信筆花鳥山水図 1幅	正宗寺	昭和48年11月26日
	市	円山応挙筆龍虎図 2幅	正宗寺	昭和49年3月12日
	市	伝兆殿司筆涅槃図 1幅	正宗寺	昭和49年3月12日
	市	白隠筆紙本墨画達磨図 1幅	正宗寺	昭和61年3月28日
	市	白土社の鰐口 1口	白土社	平成元年3月24日
	市	長孫天神社の鰐口 1口	長孫天神社	平成元年3月24日
	市	霊山会図 1幅	正宗寺	平成15年2月16日

4 人物と民間伝承

(1) 人物

佐々木高正（ささきたかまさ）

弘化3年5月20日～明治30年6月8日

吉田藩江戸詰の士族伊東安親の二男で文武両道に優れ、同藩の佐々木家を継いだ。吉田城内の武道館で剣術の指南役を勤めていたが、維新後は正宗寺内の陽徳院で寺子屋を開いた。明治6年8月16日に嵩山学校が開校すると初代校長となり「真心とおもいやり」の涵養に徹し明治20年5月まで勤めた。温厚篤実な人柄と私利私欲を超えた世話好きな気性は、村民から敬愛されていた。

後藤丑蔵（ごとううしぞう）

文久元年9月30日～昭和13年11月8日

藤原関蔵の三男で16歳の時、後藤彦之助の嗣子となり18歳で上京、研鑽を積み明治18年に愛知県収税課職員となる。同21年最後の嵩山村戸長を経て同22年12月26日初代嵩山村長となる。以来、愛知県議会議員、第7代嵩山小学校長など歴任し、明治39年には周辺4カ村と合併して初代石巻村長となり村政や教育に多大な功績を残した。昭和15年、正宗寺参道に建立された香村宜圓撰文による頌徳碑には「育英廿年 児孫蔚然 昭々遺徳 輝嵩山嶺」と結びに刻まれている。

後藤喜作（ごとうきさく）

元治元年2月18日～大正10年2月15日

旅籠屋「万屋」と石灰焼業を営む後藤孫平の長男で、明治21年5月に完了した土地登記の基本となる地籍図（公図）作成に際し、嵩山村全51字中27字の調整役員となった。20代から嵩山村議会議員・助役、明治32年からは数期にわたり村長を勤め、石巻村への合併の時は愛知県議会議員で最後の嵩山村の村長であった。旧本坂トンネルの開削においても請願運動などに尽力し、生涯を通じて、誰もやり

たがらない困難なことを進んでこなし人望の篤い人であった。

香村宜圓（こうむらぎえん）

明治13年12月1日～昭和21年1月6日

三輪村（現石巻町神郷）の香村甚右衛門の三男で11歳の時、萬福寺の鍊峰和尚に就き得度。明治28年京都の妙心寺派東部普通学校に入学。その後、明治39年に東京帝国大学文科を卒業し母校の花園学院に招かれて教頭に就任し、臨済宗大学（現花園大学）の設立に携わり、明治42年、29歳で萬福寺の住職となった。その後も本山の布教講習所長、教学部長を歴任し八名郡仏教会長や司法保護委員など勤めた。「人に迷惑をかけるな」「生涯かけて読書を怠るな」が口癖で「東洋論理学史」など多数の著書を残した。

後藤顧三郎（ごとうこさぶろう）

明治24年3月18日～昭和48年1月22日

後藤丑蔵の三男で、特待生として千葉医専（現千葉大学）に進学、大正5年7月1日には海軍軍医として任官し、艦隊軍医長や海軍病院に勤務した。昭和17年に海軍軍医少将となり昭和18年にはジャワ島スラバヤ海軍病院長として1年勤務し、帰国後、呉海軍病院の第21代病院長（広島市広海軍病院長兼務）となった。昭和21年、正宗寺に一時身を寄せ、村民の懇望に応え後藤忠男宅にて診療を行い大変感謝された。昭和24年、佐世保市で外科医院開業のため、惜しまれて故郷を去った。

後藤十郎（ごとうじゅうろう）

明治27年9月4日～昭和19年7月18日

味噌醤油醸造業を営む後藤竹治郎の長男で、中学に進み首席の成績で3カ月後に陸軍幼年学校に転校し明治45年卒業した。以後、大正9年には和歌山連隊第四中隊から中国の撫順に転任、大正15年に和歌山田辺の教官、昭和13年に石橋部隊と中国出征、昭和18年に中国黒河省北孫呉の連隊長として赴任、ハルピン

からソ連までの守備に就くなど中国各地を駐在した。温厚篤実な人柄で、転任先の兵隊からは親のように慕われていた。昭和19年7月18日、サイパン島の激戦で49歳の若さで戦死、陸軍少将に栄進した。

後藤一男（ごとうかずお）

明治31年2月28日～昭和54年8月19日

雑貨店と豆腐製造を営む後藤庄三郎^{ごとうしょうざぶろう}の長男で、小学校卒業後は父が早く他界したため家業「山庄^{やまぶら}」を継いだ。昭和4年に31歳で嵩山大区長（現校区総代）となり、戦時の混乱期には八楽豆腐組合長に就くなど人望が篤かった。同24年に保護司に推挙され更生保護や社会福祉活動に尽力し、同28年から10余年間人権擁護委員、市青少年補導員として明るい地域づくりの推進に努めた。また、同28年には初代嵩山保育園長として、円滑な運営を行い地域から尊敬されていた。

松本徳男（まつもととくお）

明治31年12月21日～昭和56年12月5日

松本彦助^{まつもとひこすけ}の長男で20歳の時、石巻村税務書記、21歳で青年会長に推され「先輩を敬え」と敬老会を誕生させ、4年後には消防団長として青壮年の先頭に立ち指導的役割を果たした。豊かな見識と穏やかな人柄により昭和22年石巻村助役、同29年には無投票により村長となり、豊橋市との合併問題を円満に解決した。石巻村教育長や石巻地区農業委員長にも就き「志を立てて長と名がつくものになれ、長になるのは偉ぶるためでなく、自分の切磋琢磨のためである」が口癖であった。

夏目藤市（なつめとういち）

明治35年7月25日～昭和36年1月18日

夏目信吉^{なつめしんきち}の長男で嵩山小学校高等科卒業後、すぐ教員として母校の教壇に立った。大正8年上京、教員検定試験に合格して、その後同13年から昭和30年まで一貫して嵩山小学校で教鞭をとり、同28年からは第23代校長となっ

た。30余年間の教職生活は校区の人達にとっては幼友達であり、慈愛溢れる父親のようでもあった。穏やかな人柄は、校区のよき相談役として公私にわたって恩恵を受けた先生であった。

坂本彦男（さかもとひこお）

明治45年1月25日～平成16年1月20日

坂本彦治郎^{さかもとひこじろう}の長男で、安城農林学校を卒業し家業の農林業に励みながら昭和22年に石巻村会議員となり、同30年に市石巻森林組合の役員を振り出しに、同48年から平成3年まで市森林組合長として、松くい虫被害対策や除間伐採など森林保育の推進に功績を残した。また、昭和23年から同62年まで農業委員としても活躍し同56年会長に就任、農業の活性化や後継者の花嫁対策など積極的に取り組んだ。さらに、土地改良の必要性を説き、嵩山・長楽地区及び市北部地区の土地基盤整備事業の推進に努めた。

後藤和夫（ごとうかずお）

大正6年4月12日～平成7年7月23日

後藤禮一郎^{ごとうれいちろう}の二男で、豊橋二中（現豊橋東高校）、第八高等学校を経て東京帝国大学文学部を卒業し、昭和17年松本高等女学校に勤務した。戦後、愛知県第二師範学校及び愛知学芸大学（現愛知教育大学）の教授となった。同38年には奈良女子大学に転任し、温厚真摯な人柄は信望も厚く同56年から6年間、学長を務めた。専攻は地域社会学で、近現代の農漁村の構造と変動や、戦後の農地改革と都市化の影響などが研究の主題であった。昭和30年の石巻村の合併に際し「石巻村誌」の執筆や地域の歴史関係にも業績が多い。

(2) 嵩山の犬念仏

① 由来

嵩山の犬念仏は旧嵩山村の藤藪^{ふじやぶ}・中村^{なかむら}・市場^{いちば}・湯巻^{ゆまき}の4嶋に伝承された念仏踊りで夜念

仏とも称した。

念仏踊りは平安中期以降、空也上人や一遍上人などによって始められた踊りで、念仏や和讃を唱えながら笛・鉦・太鼓にあわせて踊る民俗芸能である。その起源は明治年間に書き写された「大念仏由来及歌詞」によれば、源頼朝が建久3年（1192）に拳兵し、鎌倉に幕府を開いた時、国中の人々が頼朝を祝して謡った宝歌から始まったといわれている。

念仏踊りが盛んになったのは、家康が三方ヶ原の戦いで多くの武将が戦死したため、盆に霊魂を鎮める供養を命令したからともいう。



笠冠り（ササラッ子）

嵩山の大念仏については、旧嵩山村庄屋であり嵩山宿本陣であった夏目家に伝わる「三河国八名郡嵩山村書上叩」中の享保6年（1721）の項に「近村江罷出釈念仏オトナへ勸進仕」とあり、江戸時代中期には行われていたことがうかがえる。また、石巻町の神郷では、「月ヶ谷山の管絃堂に念仏踊りの道具が置いてあったが、ある年、盆に道具を取りに登ったところ、嵩山の方が早く登り、道具を運ばれてしまったので、それ以降、念仏踊りは嵩山がやるようになった」という伝承もある。

行事は旧盆の14日または15日の夜、集落内の初盆を迎える家を訪れて、庭前において念仏踊りで供養し、16日に檀那寺である正宗寺本堂前の庭において4嶋合同で奉納する習わしであった。

大念仏は、道行き・打込み・念仏・和讃・宝歌・捻りと攻め・大踊り・ササラ踊りの順序で、約1時間の構成で実施された。



灯袋



羯鼓

組織としては、青年が中心となって男だけで行い、明治前期までは藤藪・湯巻と中村・市場の2組となっていたが、明治中期からは4嶋合同で実施するようになった。

笠冠り（ササラッ子）は小学校1年から3年生まで、打込みの太鼓打ちは4年から6年生までが受け持つ。宝歌とねりの太鼓は青年が担当しササラ踊りの太鼓も青年だった。道具はすべて中年に割り当てられ、羯鼓（カッコ）の使用は中村と湯巻が担当し、背に柳を負った。才振りは中老で笠冠りの指導者で、歌も中老が歌うことになっていた。

この地方の大念仏については、幕府の「諸国風俗問状」に対して中山美石（吉田藩教授）の文化14年（1817）3月の「三河国吉田領答書」の7月の項に「八名郡嵩山村・金田村、渥美郡牟呂村・杉山村・百々村などはハウカ（放下）と云事あり」と、詳しく江戸後期の開催状況を伝えている。

② 明治以後の経過

明治維新後、廃仏毀釈の余波を受け15年程中絶しその後再興したが、昭和初年と第二次大戦中にも中絶した。戦後、昭和21年8月になって、戦没者の慰霊行事として忠魂碑前と正宗寺で実施するなど2、3年行われて再び

中絶した。その後、郷土芸能復興の声に刺激され、昭和29年に再興して個人の家を訪れず、新暦の15日に小学校校庭で戦没者供養、16日は正宗寺で実施した。しかし、昭和30年に再び途絶してしまった。

その後、復活の要望があり、嵩山大念仏保存会（会長 松本嵩）が設立され、過去の大念仏の経験者が青年や少年達を熱心に指導した結果、実に23年ぶりに昭和53年に、小学校校庭で盛大に行われ大きな反響を呼んだ。

以来、保存会が毎年8月15日を嵩山大念仏慰霊発表会と定めて同54年から実施したが、惜しくも、また中断した。

平成5年11月28日、大念仏の一部が10数年ぶりに経験者の指導によって、嵩山小学校創立120周年の記念学芸会で披露され、改めて、地域の特色ある行事の保存が検討された。

しかし、継承の方策が協議されたが、とりあえず記録映像として保存することになり、平成7年8月14日、大念仏の収録が行われた。

(3) 民間伝承

埋蔵金を守る武士 江戸時代の頃から蛇穴には、天正3年（1575）の戦いで敗れた武田勝頼が上洛の準備としていた軍資金が隠されていると伝えられていた。村の若者が確かめようと、3日分の食糧と松明を持って穴に入ったが、5日過ぎても出てこないのので、探したところ中程に倒れていた。話では、「水の音が聞こえる広い場所に金櫃があったが、その前に鎧を着た武士が座っていた。この姿を見て恐怖のあまり夢中で逃げたので迷ってしまった」とのことであった。若者は間もなく死んでしまい、その後、大雨で穴の中程に土砂が流れ込み、奥に行けなくなってしまった。

アナド婆 蛇穴は奥深く、長野の善光寺まで続いているといわれ、昔、大蛇が住んでいたのので蛇穴の名がついたとされている。その大

蛇が女に化身して姿を現すともいわれ、村の人々はアナド婆と呼んでいた。ある日、若者がアナド婆に変装して村人を驚かすため蛇穴に入ったが迷い、金毘羅大権現に祈ったところ光が差し込み出ることができた。帰宅した若者は、神棚の金毘羅様を拝んだが、その夜、急に熱が出て死んでしまった。この騒動後、アナド婆を誰も見かけなくなった。

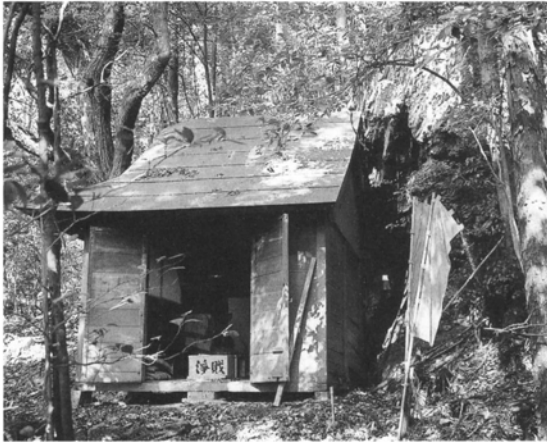
秋葉社と秋葉山常夜燈 集落ごとに、火防の神として秋葉様が祀られている。秋葉信仰は明治初年の神仏分離以前からあり、正月、5月、9月と、秋葉三尺坊大権現の流れを汲む可睡斎本祭の12月には、代参が御札を戴き各戸に配った。現在は、本祭り前の日曜日の朝に、各町それぞれの秋葉社や常夜燈前で焚火をして、全員で参拝の後、供え物の餅を分けて解散となる。その夜は日待ちで、会所の床の間に秋葉社の軸をかけ、礼拝後、直会になって御札を配り無事息災を祈っている。



市場の秋葉社

錐野御前 南北朝時代、南朝方で戦っていた高井城主高井主膳正は、石巻山城の戦いで敗れ、その家来の錐野も耳に矢が刺さる重傷を負った。錐野は後醍醐天皇の孫の守永親王ともいわれ、長彦まで落ちのびて庄屋彦衛門に助けを求めた。狐岩に匿って傷の手当てをしたが武運つたなく亡くなった。庄屋は正宗寺住職と相談し狐岩に葬り、祠を建て「錐野御前（錐野明神）」として祀った。

錐野御前は「耳の神様」として耳の疾病に効くといわれ、毎月24日や大祭日の10月24日には、地元をはじめ遠方からも訪れる人がいる。また長彦では「キリ神様」と呼んで、麓の十輪寺入り口にある遥拝所には、大工道具のキリや磐座に住んでいるガマ蛙の置物などが奉納されている。



錐野御前

庚申様 かつて庚申様の行事は60日毎にめぐって来る庚申の日に行い、人数の多い地区では大当・中当・小当と組に分け、当番になった家では「こも」を壁につるし青面金剛童子の軸を掛けた。祭祀はすべて男手で行い、勤行―食事―雑談―解散の順序だが、組によって勤行の内容が異なり、月ヶ谷では立ち座りの三拝で始まり、百礼・祓詞・延命十句観音経などを唱え、三拝して直会となった。雑談も終ると鉦を一つ打って「南無青面金剛童子」と全員で唱え、礼をして解散となった。

月ヶ谷の庚申縁起は、明治より20年程前に飯村の住人から筆写されて伝えられてきた。



庚申箸



十輪寺の庚申塚

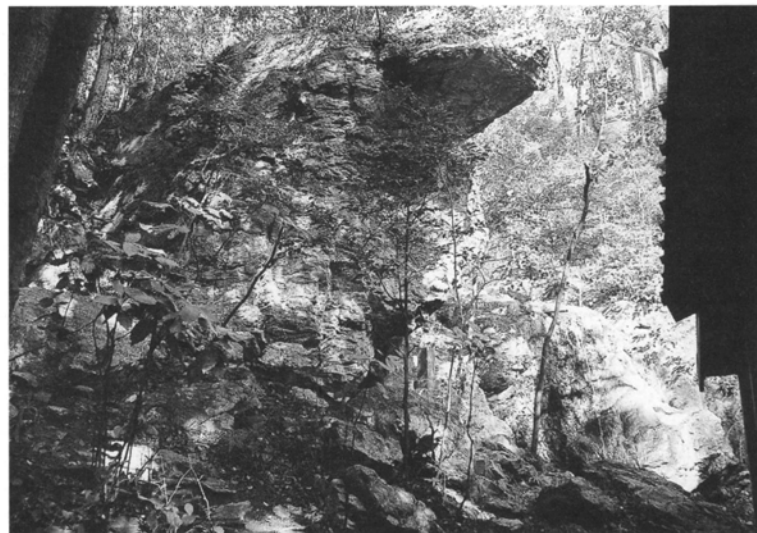
萬福寺十王堂には元文5年(1740)銘の日月六手青面金剛童子石像があり、西村和泉守が天明3年(1783)に製作した鉦や、掛軸・折敷・椀・庚申箸などがある。



萬福寺十王堂の青面金剛童子石像

この庚申様の行事も、平成10年頃迄には各地区とも廃れてしまった。

不動様 旧嵩山では荒沢の不動様として、今でも12月初めの日曜日に、赤飯2升を炊いて、早朝に不動様に供えお参りをしている。平成3年の豪雨で滝壺が埋まり、景観が損なわれたが、御籠り堂も修復されて、月参りの19日には不動経が聞かれる。月ヶ谷にも若一王子



荒沢の不動様

社と空ノ池の北の不動大岩に不動様が祀られている。

高札場 江戸時代に奉行などからの告知をする高札を掲げた場所が高札場である。月ヶ谷には、土地改良前には高札道と呼ばれる道があり、現在の公会堂の場所が高札場跡であった。旧嵩山は「本坂通分間延絵図」などにより市場にあったことが判明した。

七曲り 嵩山七曲りは天保14年(1843)編纂の「本坂通宿村大概帳」に「本坂村ハ字七曲り本坂峠ノ難所有之此所三遠両国ノ境ニ而風景ノ勝地也」とあり、七曲りは本坂村地内にあると思われていたが、「嵩山村地籍字分ヶ全図」等により、この景勝地が嵩山側であったことが判明した。近世の歌人香川景樹もこの付近で歌碑になっている和歌などを詠んだ。また、長彦七曲り、月ヶ谷七曲りもある。

賽ノ神 賽ノ神は旧嵩山や月ヶ谷にあったが、旧嵩山の賽ノ神は、「イボ神様」ともいわれ、石に溜まった水をイボにつければ消えると信じられていた。豊川用水の工事で左京殿城址に移祀した。

山ノ神 山仕事の安全を祈る山ノ神が集落ごとに祀られ、山に入る山道に数カ所祀られている。



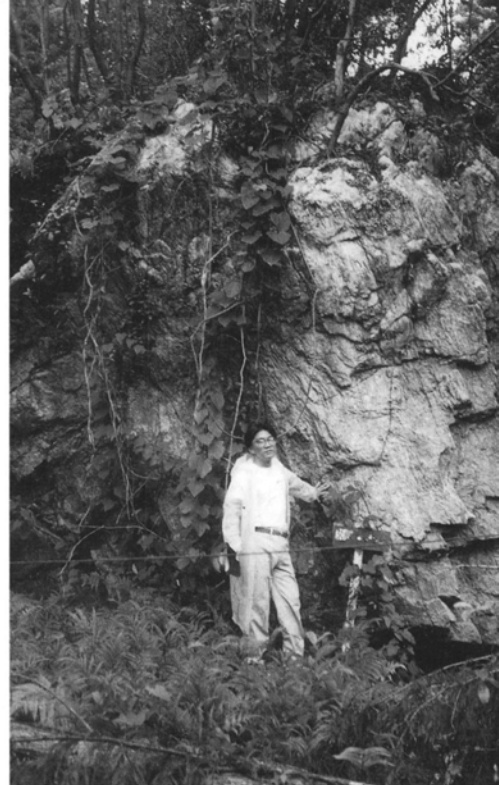
月ヶ谷の山ノ神

中島屋の木の芽和え 旅籠屋であった中島屋は、木の芽和え料理が有名で、姫街道の三河側での三名物は、「嵩山の木の芽和え」「長

楽の饅頭」「欠間の玉寿司」と言われていた。**茶屋** 姫街道の本坂峠には昔、茶屋があって「領主茶屋場」または「峠茶屋」と呼ばれていた。また、座禅岩付近にも茶屋があった。

弘法水 姫街道の嵩山七曲りの東、峠近く弘法水と呼ばれる弘法大師ゆかりの水場がある。大正初期まで営業していた峠茶屋はここからの湧き水で旅人に振舞っていた。

巨石 旧嵩山には、名勝「どんがめ」があり数十年前は大きな深みがあり、昔はよくウナギやズガニが捕れた。大山浅間社周辺には、富士山遥拝の富士見岩や一の鳥居が建っている千枚岩がある。豊橋ヶアセンター東には浅間神社の遥拝所があった御輿休み岩、坊ヶ峰には夫婦岩、正宗寺北には安禅岩がある。月ヶ谷には、空ノ池の北に天神社が祀られていた天神岩や殿様岩、不動大岩がある。長彦には、字名にもなっている二つの立岩、大知波道沿いに御用岩、滑り石、長彦峠付近に鉄岩、弓張山脈稜線の航空灯台跡にある割れ岩や烏帽子岩、錐野御前の東に仏岩などある。



名勝どんがめ

長彦の立岩



編集後記

今回、100周年記念事業としての「校区のあゆみ—嵩山」をまとめるにあたり、基本として平成5年に刊行した「郷土誌嵩山」を底本としました。ただ、限られたページ数の中での内容ですので詳しくは「郷土誌嵩山」をご覧くださいと思います。

本書によって、嵩山の概要・変遷を知っていただき、豊かな自然の恵みや歴史の継承をはじめ、新しい時代の中で故郷を慈しむ一助になれば望外の喜びです。

微力な委員に対して資料の提供や取材など、色々ご教示、ご協力をいただきました校区の皆様のお力添えに感謝申し上げます。

編集委員

平松 英樹（藤上）
夏目 憲二（藤下）
後藤 清司（中村）
後藤 惇（中村）
井戸 正巳（自由ヶ丘二区）
平岡 久章（自由ヶ丘三区）
中山 昌訓（市場）
高橋 和夫（月ヶ谷）
藤原 裕一（月ヶ谷）
中野 精司（湯巻）
野尻 巖（長彦）
墨岡 成治（サンヒル嵩山）

参考文献

- ・嵩山郷土誌編集委員会「郷土誌嵩山」平成5年、嵩山郷土誌刊行会
- ・石巻村誌編集委員会「石巻村誌」昭和32年、石巻村役場
- ・八名郡「八名郡誌」大正15年、八名郡
- ・豊橋市史編集委員会「豊橋市史第1巻～8巻、別巻、史料叢書」昭和48年～平成17年、豊橋市

- ・豊橋市神社誌編纂委員会「豊橋市神社誌」昭和44年、愛知県神社庁豊橋支部
- ・豊橋市仏教会「豊橋寺院誌」昭和34年、豊橋市仏教会
- ・豊橋市政50年史編纂委員会「豊橋市政50年史」昭和31年、豊橋市
- ・愛知県「愛知県史第1巻～4巻、別巻」昭和10～15年、愛知県
- ・豊橋市立嵩山小学校「嵩山小学校沿革史」昭和59年、豊橋市立嵩山小学校
- ・豊橋地学同好会「とよはし地学めぐり」昭和55年、豊橋地学同好会
- ・嵩山郷土史研究会「嵩山郷土資料目録1」昭和59年、嵩山郷土史研究会
- ・嵩山郷土史研究会「嵩山郷土資料編 棟札集」昭和61年、嵩山郷土史研究会
- ・藤原裕一「姫街道の盛衰に関する歴史地理学的考察」昭和55年
- ・藤原裕一「姫街道嵩山歴史文化郷創造計画—歴史を生かしたまちづくり」平成6年、月ヶ谷歴史民俗博物館
- ・八名郡嵩山村「改租字限図面綴」明治9年、八名郡嵩山村戸長役場
- ・豊橋市美術博物館「正宗寺展」平成14年、豊橋市美術博物館

協力者等（順不同敬称略）

松下 滋、天野みどり
嵩山小学校、嵩山保育園、正宗寺、萬福寺
豊橋市美術博物館

校区のあゆみ 嵩山

平成18年12月25日発行
編集 嵩山校区総代会
嵩山校区史編集委員会
発行 豊橋市総代会
印刷 髙きょうせい

100
古紙配合率100%再生紙を使用しています



